

特 8

741

古今  
實錄

# 北條時賴記

卷  
四



北條時頼記卷之四目錄

- 禪公難波の津ふ着の事
- 井難波の禪尼の事
- 禪公古寺ふ立寄給ふ事
- 井播磨の禪尼物語りの事
- 孝子邦忠老父を撫撫る事
- 井禪公老夫と説話の事
- 最明寺入道高野山參詣の事
- 井修行者の咄を聞成じ給ふ事
- 燈籠堂ふ通夜の事
- 井異僧と説話の事
- 禪公美濃國へ到る事
- 井一男を戀し一女を救ふ事
- 禪公山中ふ迷ふ事
- 井隠者の語を聞驚嘆の事
- 禪公佐野の庄へ到り給ふ事

井常世宅ふ止宿給ふ事

- 浦尾が奴僕廣川ふ乱暴の事
- 井浦尾が奸計廣川を陥る事
- 時頼禪公鎌倉歸館の事
- 國々の四民正邪賞罰の事
- 井市坂權之丞の事
- 佐野源左衛門本領安堵の事
- 井佛平六肥田を賜ひる事
- 禪公老僧の物語を聞給ふ事
- 井原田常直歸城の事
- 時頼禪公更ふ法制を建らるゝ事
- 最明寺禪公北の新亭ふ籠り給ふ事
- 井逝去の事
- 相模守時宗執權相續の事

北條時頼記卷之四目錄畢

明治十八年十二月廿三日内務省贈付

北條時頼記卷之四

○禪公難波の津ふ着の事

井難波の禪尼の事

禪公の圖らする平六郎がもと宿したまひ飢饉施行の物  
 宿りおその住古と去のびかつ平六夫婦が篤實と成じたま  
 ひ翌日名残と此家とをいめとれより紀の路和泉國を經廻  
 し日と經て難波國難波の津ふ着たまふ（其頃今の難波  
 の大都會の引かへて未と三郷の分ちある海濱なり）實  
 や世わたる賤が業の何國もあはじことながら殊さら難波  
 の蘆の屋の拙くむ海人の原まきくいとなむ業のあこれさ  
 を禪公つくつく見じつ、感慨の泪袖を浸したまふ紅  
 目すや西山の暮り夕陽告ぐる宿鴉の聲も現ある家居よ  
 立寄りて宿をこいんと見たまへば昔しし由ある住居と見  
 れど築地やふれ軒かたふき時雨も月も漏ぬべき風ふま  
 せし草の戸も夕露ふりく閉られていと、袂もぬれまざる  
 人やいまをと案内の聲ふ六句お餘りたる尼僧の立出て何

○禪公難波の津ふ着の事

井難波の禪尼の事

人ふやとこたふるお禪公の頼きて見たまふとき抖敷行  
 脚一宿を接したまへよとねんころふのたまへば僧お  
 宿りさん願ひてもなきさいはひなれを説いて住なる賤が  
 家の藁沙草より意物なく穢業の外に設けもなしさらば  
 宿の甲斐わらずと辭せることばお禪公の日も早西ふ入相  
 の往先とても覺束なけれは強て一夜と念たまふ夫たふ  
 まのびたまふとならは何うの宿りを惜むべきと兩僧と  
 もなひ板敷お越敷たる一室お迎へ老尼手づうら夕餉とど  
 のへ権の棄折敷て餉盛り禪公入道おま、むれは放おし  
 あれは権の棄の故事までも覺しあひせ快よく食しをわり  
 て老尼お向ひいと甲斐なくしく見えたまへと、かゝる水仕  
 を仕馴たる人とのさらお見えざるを其往古の何人おや聞  
 まはしどのたまへば尼の瞳お涙をうらめきと亡父の此處  
 の一分の領主なりしが妻おも子おさへ死後れ便りおき身  
 となり果しお朝食のけふり心細く夫さへはとくたて  
 たるを只押置りたまへかしとまた滑々と歎くさま禪公も

殊さら不便おぼしかりる浮世を捨坊主の身お似合お  
さし條なれど其没たまひし其許の夫何と名乗たまひし  
を尼の袖もて涙をぬぐひ更おやさんも取うしおがら故右  
大將頼朝卿平家追伐ありしとき相應の軍忠ありし難波六  
郎左衛門とせし者源家の侍代と榮えてのち其勲賞を  
行われ此處をたまひりて尼が夫六郎左衛門まで三代連続  
きて相傳せしお六郎左衛門不幸て没して後引續き子  
なる三郎も世を早ふしつれぬく残る露の身の朝夕ぬる、  
袖袂干す隙だももなき折から尼が爲お小島なる夫六郎  
左衛門が弟お瓜生權頭景貞ある人鎌倉殿お何とどうやけ  
ん世々傳へたる所領をさへことごとく押領せられ翌の餉  
さへ貧しきまでかく零落てさふらふと涙お詞も咽ひける  
禪公の笈の中より小硯取出て

なほはがた擲干お遠き月かげの

またもどの江お清ざらめや

と墨紙お書付て尼お與へ我の鎌倉迄のおもまゐる身なり

の襟は休らひ笠の平衣の袖を絞りたまふ障子の内より四  
十歳ばかりの尼のたち出で驟雨のはおいだし左社を困  
じたまふらん此方へ入らせたまひてゆるく晴間を待た  
まへと懇るおいひ出せば其の添けなし去りながら外お人  
なき尼僧の室へ休息なさんもいりやどど打笑ひつゝのた  
まへバ尼も俱お會釋して男女の隔てありといへど同じ  
慈悲の道お入り世を住すつる墨染の袖いりて色香の殘  
るべき禪公も打らなづき木の端炭の折おひしし雲水一  
樹一河も佛の導きゆるさせたまへど二階堂と、もお禪室  
お入りて尼おむりひ其許いまだ若き身のかゝる里離れの  
孤庵お住澄したまふ堅固の道心深き佛縁のあるならん願  
はくはさうんことを尼の此とき慈涙を流し實や懺悔お  
十罪を減すと聞けばよしなき尼が昔し物語りその一二  
を聞たまわれ尼が父の河内國おて石川彌七兵衛とせし  
が妾十八歳の春同國生馬權右衛門尉お嫁し後嘉祿元年  
の秋八月父彌七兵衛身没りしが不幸おして同年の冬母お

よき折もあらば妻しやさん心づよく待たまへど二階堂と  
もくいさめ睡し一夜を明して立出でたまへバ尼のこゝ  
さら名残を惜み門邊お出で後蔭陰る、までも見送りたり  
後日禪公鎌倉よかへり難波の尼およ瓜生權頭を召され  
本家押領の罪を責め伊豆の大嶋お配流したまひ瓜生が所  
帯を没收なし本領と、も尼お返しおたへ時宗君の昵近  
鎌原何某と以て難波の家名を相續させたまふ尼のかの行  
脚僧の最明寺殿なるを始めて知り難波江の詠歌を更お尋  
み家の寶と傳へしと聞く去程お禪公の難波の尼が家を立  
とされ河内山城より三丹を經歷し給ひける

○禪公古寺お立寄給ふ事

并播磨の禪尼物語りの事

扱も禪公の翌年の六月ばかり播磨の國おいたりたまふ左  
なだお炎熱たへがたきお一群の雲うち捲ひ神さへおど  
るくとなりて稻妻さちめくはどこそあれ白雨盆を傾く  
ことく行先だも分らざれば傍へなる右寺お走り入り堂

るものも世を辭して妾孤獨となりぬれば愈々夫お二心な  
く心のおよぶだけを勤めしお權右衛門尉が性裏心あく  
まで猛くして仁慈の自くら薄くれバ平常お符を樂しみと  
し朝暮山野お身をおきて鳥獸を殺すこと數多なり妾常よ  
これを哭ししげ一夕ふしぎの夢を見る世を去りたまひし  
我が父のいと淺猿しきまで瘦れはて妾が枕上お來りたま  
ひ愧しなから告ぐる事ありわれ前生の業おより畜生道お  
墮罪なし妻なく雉子となりはて、春の野ならぬ此山邊お  
あさるお猶も因果のめぐり來て明日の葬なん人も多きお  
其許が夫權右衛門尉が矢先お命を縮めんとす予いり小も  
して矢先を避けこの家お遁れ來るべし其許夫をいひ慰め  
わが死を助け得さしめよと告ぐると思へバ夢さめぬ其淺  
ましき限りなけれと夢の五臓のわづらひとも跡なきこと  
を夢ともいへバ憑むべきおあらせと疑惑こゝおまぢ  
くおして夫おそれとも告ぐる間お夫弓箭を手挟みつゝ、  
翌朝て狩お立出たり斯て其日も申刺通り家童下部が聲お

前よ後よと騒ぎ廻る何事やとたち出て聞ひどつの子の雄まよひ来て館の内へ飛入たりと首棄の下ふ大なる雉子愛をのぐれ彼方へ飛こえ妻が膝下へ来るとひとしく恐るゝ色なく膝上へ羽を縮め震ふ容静まゝ、おゐて夢の告の空ことならぬを始めとさどり我が父君とおもへば猶そゝろふ悲しみ涙溢しく頭かき撫で脊を揉む最嬉しうるありさま下部等より物どらせよきおこしらへ伏籠へ入れ餌を供へ小袖を被けて隠し置きしお夫権右衛門歸り来て即日の獲物も多うりしと一入のよろこびなれば最上折節と昨夕の夢今日のやうす具さふ告げかの雉子を懐きて夫お見すれば夫のこころ打動笑み我乙日お此鳥を見付たびくのひを定むれど如何なりけん仇矢となり箭先をのぐれし賢者なれといひつゝとつて隠れんとす妻おどろき其手おすがり窮鳥籠中へ入るときの獵人すらこれと捕へず殊さら見たる正夢の父の再臨とさくなれば此鳥の妾おたべ心行まで孝養なさんと種々詫ども且不通聞がて

吾が手を拂ひ一擧下れば目口より血はと走り其ま、死たり妾が悲しき言ばうりなれたとへ正なき夢おわれ妾が再臨りの父といひ、よし愛憐の加へずとも害さふゆるしたまふべきをとおもへば思ある夫ながら父の誓ある思ひして人の心のたのみあく浮世の中の味氣あく出家遁世の志ざし止めりね遺髪せんことを夫おねがふ初めのほどに取あへねと屢々これのみ願ひしを方見こと、思ひけん左あらば其ま、出べしと怒りお乗じて追ひ出す原より佛の仕ゆる身錦繡をかへりみる心もなく夫の暇まを出離の門出この庵の先住尼妻ゆりのあるお便り本意のごとくお黒髪を殺し明暮お父母の菩提を祈り早七とせおありたれば心おかゝる雲もなく有がたき身とさりけるぞと舊懐の涙を流せば禪公も二階道も俱う衣の袖をひたし前業因果報的のならひ今お初めぬことながら不測の話しを聞ものかなまうしなから佛縁の然らしむる處いづゆる一子出家するごとき九族天お上る法語非業お死せし鳥獸もすな

ら悪因解脱して華の臺のぼりなん頼もしくこそ思されよさてもかく通世の身となるより絶て舊里の便りも聞かず此頃國人の來たりていへるの領主の残忍なほ止ざるお愛妾の寵お政事乱るお悪きおまつぐる者ありしが其是非の知らずおとたふるひまお定めなき白雨もいつしうとれて日もやうく傾け禪公の暇を乞ひ一所不住の行脚なればまたこそ參ることもあらめとねんころお禮謝なしやがて此庵を立出たまふ鎌倉お歸國の、ち生馬権右衛門を召し出し殺生禁斷の法政を犯しおまつさへ妻の夢みし父の再生たどへ跡おきことおありとも無算お生を害する残忍さら愛妾お神心をどろろし政事を亂る其罪をうぞへ所帯と没収し重く追道ひなしたまひまた播州の禪尼親孝おつさを褒稱し生馬の所領の地をもつて佛供料お寄附したまふとせへり

○孝子邦忠老父を撫恤る事

井禪公老父と説話の事

紅葉の錦神のまわりの神詠より以來世々の雅客の愛觀せらる大和の國龍田山の秋の景め實お日本の秋の色こゝろ寄集めたるごとき黄紅淡濃山姫の錦繡の衣をさらまがごときこれがため遠近の貴賤群をさし楸下お幕を張り花魁をつらね詩歌連誦のがまお、盃を舉げて今様を奏し樽をたゝいて謠曲を謡ふこゝ、お三十歳ばかりの壯士父おやあらん六旬おあまりたる老夫を背お負ひ里の小童お荒越小褌おもたせこゝ、かしこの楸の下おイみそのすぐれたる烟光を賞しやがて老夫が指頭の方お慈を敷せやをら老夫を背より下し左こそ腰脚屈痛たまはんと脊を撫で脚を摩れお父の其手とどめ支へいやく汝こそとるゝ坂道重荷を負ひて苦勞ならんゆるくと休息べしとたぐひお敬ひいつくしみやがて里の童お齋したる一瓢の村腰一器の乾魚どり出でねんころお勤盃さま節を亂さず親睦の形容傍らの楸の根お腰かけたる兩人の旅僧別人ならず禪公主従お先刻より情々この体を見たまひしが

此ときお燈をうけ花ふ親疎のへだてをしといへば楓下ふもまた等しかるべし兼て紅楓の名所とさげを思ひさや斯ばかりの勝景ならんどの足下は當所の人に見えたり秋どどおの絶えずと賞し給はんぐらやまじしと宣へば老夫も頓首なし先より接話せんとすれを尾羽を枯せし賤き身のものやさん無禮なりとためちひありし夕傭くも我お言葉をとたまふものうな耳遠うらねと秋風の隔てあり荒庭お招請せんこと憚りあるおの似たれども木の根石上おの用るべしこなたへ來りて思ひたまへ壯士の身を起し禪公の前おいたり願くは不敬をゆるし彼方お來たり思ひたまへ老夫も左こそ辱けおくらめと兩士が懇懇なる言葉よりてさあられ少頃席を汚さんと二階堂ともよ庭お圓ひし老翁の脚痛たまふと見えたりさぞな不自由お在ますらめ老夫頭を揮りて答ふるお貴命のことく舊病ふて筋骨縮まり一步も今運びおたくされどもこれある吾が悴事ふることの厚ければ四季のさぐめ神佛まよで時をも日を



己がまおく脊肩をかりの騎馬乘興昔し世ありし時よりもあうく即今心易し兩位の大徳の諸國經歷山川海陸の勝景或ひにくさくの珍説奇事面白く二光を過したまひめ己のあたりも井中の蛙人傳およも聞まはしといへれば禪公打わらひ葉家の雨の出て聞と傳言あれと目を閉ぐれば万里も一瞬のうちお観じ耳を押ゆれば善悪も一心お聴ゆさらお手足を煩らはさんや老士手を拍て曰實や羽翼なふして千里を翔り足踏おふして百里を走るの謂あらん面白しく極樂の西おありといひ思ひみかみお有りといふ事をまれば己誤てりくどたがひお禪味の答話のうち壯士の茶を煎じさやうある繪櫃を取内おも外おも月雪もかいらぬ父子の咄し敵珍らしき語しもあらざるお今日のさいはひ大徳おまみえ父も樂しくおぼすらん怪しの一瓢も持たれど大徳おのはさうりあり手製の團子を焼たれれば殿しうりとも召されんやと権の乘からで紅葉折敷兩僧と父お供へつ煎じ茶くみて觀ひれば禪公の其至孝

を尊みこころよくこれを食し茶を喫し了り老夫おむらひ事卒爾おの似たれども壯士が至孝老士がふるまひ更も賤夫どの見まわらせすいりさま由ある人なるべし袖の振合せも奇縁といへば其往古を聞せたまへ老士の此とき容体をあらため忘れて年を經しものをさらお舊懐の泪襟を浸すお中さんも面伏おれど何を強てつむへき己の安藤文吾右衛門邦久これなる俾の新平邦忠とて先年反逆の穢名お亡びし三浦泰村が一族ある能登左衛門尉行長が臣たりしが主君行長三浦が勤めおよりひとりお泰村お組せられしを某し爪まさつせしより數代の名家も斷絶の時節やこ、お到來せるうと和漢迎臣のためしを曳てしべく君を諫めし折うら時頼君の仁慈おより泰村等も先非を悔ひ和陸平安と聞し嬉しさなはも君お咫尺して向後を諫めたてまつりしお己が微忠を容たまひ不日ふた、お事を獲せんと三浦より密使來れども先約おたがひ病ひお説し催促お應じたまひさうりしを泰村が黨これらうたがひ問者をも

つて實を探り己が練めし始末をさ、知り憎きとや思ひけん事お詫して某しと三浦が宅へ招きよせ力者を伏て害せんとす己も豫じめこれを知りたれば力者兩人を其座お切伏せとつて返し玄關まで出るよ射人の誰ども白羽の箭飛來つて某しが腰骨せめてぐざとたつ道哉卑怯なりとかなぐり捨て馬上お飛乗り一鞭呉れ私宅お歸るお箭紙の痛苦お君前をしばらく遠ざりる其隙お泰村いりお謀りけんふた、び三浦お荷擔なしつひお備名よ家をうしあふ某し潔白ありとつていへど流石お逆徒の隙を喰へば生害せんとおひしを親族さまへいさひるよ心の猛くおもへども痛手お動作もなし得さればをめぐ人の介抱けを請け鎌倉を立退き當國お來りて後やうく矢銃の癒たれお筋骨を縮めしやらん歩行不通おかおねお再び弓箭も取がたく元より二君よ仕ゆる心もなくいたづらお整居せしよ日々お貧苦おせまるといへども悴々孝養お心うれしく我おいさへう不足なればお悴を民間お果せん夕口惜く鎌倉お登

りて身を立よとまバくいへど鬼お角お父を奪て、榮えをかもふ天の道お背くありと曾てこれを承継せすといへ我もかゝる廢人其うへ既お老耄遠くおはなさんもお心憂けれバ昨日と暮れ今日と過ぎ空しく二光を今日と送りぬと慈涙をうりて物語る禪公心中を感じたまひ焼野の雉子夜の鶴だお子を思ひさるものやある況や人倫お於てをや吾儕等ハ世捨人の何の甲斐なき身おれども是より鎌倉お登るなれば今日の奇遇お心懸てさるべき青雲の手便りあらバ早速お知らせせまらせんとねんころお約をなし是の物おたりの面白さお紅日西山お春くをわする今宵の宿りもほゞ遠みと厚く禮謝してこゝを立去りたまふ禪公鎌倉お歸りて後安藤新平を召し出し汝が父文吾右衛門逆徒行長が臣たれば一旦當國を追還なすといへども汝親孝の厚きこと將軍聞し召しおよばれ其褒美として父が追國を思免おし鎌倉お召返され汝のまた將軍家お奉仕なさしめ秩祿許多を賜ふ旨を命じたまへバ邦入身お餘る恩

恩を拜謝し父を鎌倉お迎へ其身の直參とありて美名を四方よかゝやうし故郷へ歸をかざりしにまつたく至孝の譽れぞとらやまざるのななりしとかや

○最明寺入道高野山參詣の事

井修行者の咄を聞感し給ふ事

山遠くして雲行客の跡を埋み松寒ふして風旅人の夢を破る扱も最明寺時頼禪門の國々の名所古蹟神社佛閣の盛衰いもとより領頭地頭地士ひをはじめ民間匹夫匹婦おいたるまで邪正善惡を索りたまひささだお旅行の長途お赴けバ一日だお物憂く悲しきものを況んや何日を限りとし何國をあてど定めたる方なく煙霞万里の道の末深き山路お分入りての青苔の起お露をかたしき郊原お行暮ての狐火狼聲を友とし身命を天下の爲おなげうち心苦を万民のためお捨てたまふの感佩りける井修行なり斯て長日數を經紀伊國神谷の宿おいたり是より野山お登山し靈場順拜したまへんと山また山水また水お分入りたまふお流石

お身力疲れさせたまへバ二階堂入道甲斐しく細手を引き腰間を押し己お半腹まで登りたまひ鬼ある石上お腰うち掛休思したまふ折らちお同じ容したる獨りの修行者おいへく聲して登り來り俱も此處お筋をたて聞しお倍る高山屈曲貴僧方も疲れたまへん吾儕も少頃し休みなんゆるさせたまへど傍らなる芝生の上お平座して摺火を打て煙草を煙らせ何彼と説話りする容さらお言語おへつらひなくまろも老實のありさまお禪公もこゝろよく應答し足下いまだ壯年あるま如何なる宿縁お道れてう斯く僧徒とハおりおけん彼僧ははくく點頭賢くも問ふ人りな吾儕が染衣の身となりしハ長々しゆる由來あり路々語りやべしいさ當往貴僧たちと此處より三人打連だちまたも山路を分登る彼修行者の後邊をかへりみ外お聞くべき人おあらねバさらバ身上を語りやさん世おありがたき人おあるものかな愚僧ハ下野の國小申谷を領したまふ平野佐右衛門尉善長が下郎なりしが主君善長元よりも廢直おして仁慈ふ

うく専ら領民撫育のため日夜心を苦しめたまふ或るとき深慮ましくして遠卒お朱第の門外お松の柱お板屋根りけさせ倉庫の積米三十俵を運び積せ圍りおまばらざる垣を結しむ家臣等の其意を得ず番士の員數をうりへばかからず番人かくべりらす寡人思ふ處われバ兎角お其ま、聞けどのたまふ其夜の何事もあがりしが第三日目の朝おいたつて積たる米俵過半をうしなふ臣等おどろきその旨をうつたへ番卒をおうんどりうりへしお主君いさ、う心ありけずお其まお捨ておうせたまふおまた二三夜を經るうら積米ことごとく紛失す臣等一圓お其所以をまらす只積米をうしなふことを惜み君お強て其意をうりへしお君莞爾としてのたまひく左こそ不審おもふらめ我公けの法令をつしし常お領民をして賑うお守らしめ諭すお勸善懲惡もつばらとすさいはひよして久しく慈訴をきりす然れどもなほ人心を試みんと斯はうらへせ様し見るお夜々法令を犯して物を盜むこれ我が政事の到らずして國

困民あるがゆゑお其うしなふ處の米穀の我お損われども掠めし者お益あり我かおしむらくは其罰の到らざるを自ら殊お悲愧したまひ以來いよく仁政を施し法制を守らしめたまふこと三年其のち第宅修葺の料にて山林より竹木を伐らせまた門外お積せらる、事三五夜ある夜また其半とらしきお君の事どもなしたまひねお我々ひをりよおもふお斯まで君の仁惠をわりがたしと思ひずしてなほお掠むる奇怪さ何奴おらん見どもんとひそりよ五七人いひ合せかの竹木の陰おしのふ案のごとく十餘人の賊夫手拭もて面をおはひは、くる容体なく此處おあつまり汝これもて我かれを否々其の重し己これをどたぐひお力を惜み手分する容かつて怖る、心なく殊さらお魁首めける男大口開てからくと笑ひ嗟呼痴なるかな此領主前お米穀と積み今また竹木を置く此以來お金銀を積かくべし代なすお手間入らじと飽まで嘲諷大膽不敵我々見聞くお堪忍しがたく惜お集奴が難言かないでや威して後

日とこらさんと一齊お躍り出おのれ肝太くも盜みを働きたそのうへ領主をさみする惡言ゆるし難しと飛り、れお思ひけさる我々お監人いりでおせりうさらん竹木を捨て逃る中お彼魁首めける者突立て盜賊呼り事笑し米穀竹木お人倫の必用空しく大道お棄れたるを冥加をおもふて取擧げたるを何ぐゆゑお盜賊よバ、り聞ずてならやといふま、お落たる木端と振まはし敵たいか、れお我々も憎さ士民の言條りお此期怒憤止めたく我おやまつてかの者お薄手一刀負せしりバ流石無頼もこれお恐れ廣言おも似せ逃失せたり日頃の鬱憤こ、お散じ取り乱したる竹木を集め面々宅お歸りたるが隣縣お北條家の領おてすなほら代官横溝郡治右衛門より翌朝使者をもつてお越するの昨夜領分の百姓等數人所用あつて深更おおよび貴第の門前を通りしお貴所の下部と口論おおよび北條氏の領民をまは、うらす痛手負せしだん不屈の到りよつて相人の下部をわたさるべし思ま、お聞せんといふお主君早く此

ことを察知したまふお彼の使節お而會し扱いたびくの偷盜これ北條家の領民とやおを盜賊を誅すること武門おおいて珍しうらすたどへお領の士分たりとも偷盜なせる輩らを手を束ねて餘處お見んやこと更輕卒ながらも某しが家來法を犯す盜賊の報殺おいりてまゐらるべき法りあらんと取てもあへざる返答お使者ふた、び口を開りす赤面なして歸りしが横溝いりよとくりけん其後鎌倉評定衆より内々の使節立りてこの争論を穿鑿あるお主君前の件をもつて答ふ使者ひそりいへるお足下の、ふる處理非明白なり然れども相人の北條家の領民私しの理を明らかにせんとすれバ北條家を蔑しるおするの理りならん乎其奥お諂んより筆電お諷よ必竟輕卒一人の命を憐れんで北條氏の憎みを請たまひんこと然るべうらすこれ私しの慮よあらずお評定衆の内意おれバ執權の命お同じうるべしお主君謹んでたどへ私しお理ありども公命いりて違背すべし然れども彼お彼の君忠おしてさらま死お宛べし罪

あらず元よりかゝる公命をうけたまはるることこれ我が政  
 事のいたらざる所にして民を領する力足らざるなり其任  
 おあへずして任あまるは是君よいつる所おして不忠の  
 至りなれば我即日冠纒を權門お懸け直ち本國を立さらん  
 さらば北條家の武威をも倒さず横溝も本懐なるべしと室  
 家を親族に詫し家財を巨等お預ち與へ夜よまされ家を  
 たまふ是はまつたくおほけなく己が命よかはりたまふ  
 どおもへばいと空恐ろしく主君が壽命長久を祈りか  
 つに己が犯罪消滅かたゝく蓬髪染衣と容を變諸國社開を  
 願拜し二つお主君の安否を尋ね侍るお人あつて善良の  
 野山の坊中お整したまふと風の便りお聞しより何卒君お  
 再會し生涯薪水の勞を助け万部一の報謝せんと扱こそ登  
 山するどころなれど一什一伍限なく踊るお禪公聞たまふ  
 まふく心の裡ふ一たび驚き一たび感し更お青砥が先言  
 を思し合され全身お汗を流したまひて山徑屈曲もこれ  
 爲おほぼえたまひすやうやく大門おいたりたまへば彼僧

杖をどめ俱お靈佛に願拜せんとすれを切りお主君の  
 陰度よ心せうれぬれば爰より諸坊舎を尋ねめぐらん名殘  
 をしくいおもひながら懇懇お別れを告ぐるお禪公も純忠  
 老實を感じ再會を契りて立別れ禪公の吻と息をつき思ひ  
 さや北條が權勢かゝる仁慈の英雄を斃さんといはれまつ  
 たく空海大師我道崇め微志を憐みこりらすも邪正を告た  
 まふあらんとそゝるお落涙ましくけるさて此處より案  
 内の僧を頼みまづ大塔お詣りたまふすきはち安置する兩  
 界の曼荼羅の平家の棟梁大相國清盛公の手づうら書たま  
 ふ符容と禪公聞たまひ二階堂入道おのたまふお體惡無愆  
 の淨海公もいりなる宿善も備されかゝる善根をなしたま  
 ひけんこれを以て昔しをおもへば暴惡のみおあらざり  
 けり人の性善おして性惡いなしまうれども去のび難き一  
 惡あれば史官となはだしく記すぐゆゑ後世爪はじきして  
 是を憎む十善の一惡を減じ一惡の十善をおほふ人慎ます  
 んおあるべうらす恐るべしくと自らいましめ夫よりう

すくの堂舎案内おつれて願拜し落花雨と降せも笠を着  
 ることなく深樹暮をおやまれども日いまだ傾りざればた  
 ちち小興院へ參詣し大師入定の室の戸と拜しよりく志願  
 の冥助を仰ぎ宿堂舎のこりなく拜禮したまふお四面お墨  
 々たる五輪おの舊苔みせりを顯りし辛々たる石塔お其  
 名多く滅し士農工商何人お此土お留まり貴賤男女雖も無  
 常の風を免るべき七情六欲の人間の假の夢憂さよるこび  
 も一堆の下お埋れ愛し悲も同じ黄泉の友なりといよく  
 菩提の道を感じ一切有縁無縁の精靈佛果蓮華の法施をお  
 したまふ爰お一箇の石碑あり本性院曉和童子美濃國藤井  
 氏俗名次郎五郎と墨漆もいまだ鮮うなるを案内の僧指し  
 て老少不定の世の中ながら分て哀れあるは此碑の主あり  
 美濃の國おてい戸瀬といふ所の領主藤井孫八郎といへる  
 人男子二人持たりしが兄の次郎五郎のすあひち此碑の主  
 にて先妻の子次郎吉といへる召仕の腹なりしが本妻不  
 幸おして死去のちこの召仕の女を以て後妻とす實世中

お類ひ多なれを繼しお中は氣疎さいなしこの後妻繼子  
 を惡むこと尋常お勝れてはあひだしく父お繼訴の元より  
 おて佛お願ひ神お祈りあらぬ修驗者お黄金を與へ滅死せ  
 んことを呪咀なせども神鑑信を助け佛眼邪まを惡みたま  
 ふ理りわづうのゑるしもあらざれば彌々身神をもだへ苦  
 勞をうさねかの謫さお人お阻は、穴ニッ堀れといへる如  
 くかへつて噴患の焰はお身を燒せも次郎五郎の何の障り  
 もあらずつひお志學の眷おいたるお天性至孝仁慈よりく  
 後母のつらさを露怨みすたまふ人あつて後妻が毒心を  
 告ぐれば次郎五郎さらおこれを詰りお他人さへ老たる  
 父母のごとくお敬へどのいましめたとへ以前お婢女お  
 もあれ父が許して後妻となし親子の名乗したるうへ時  
 々お折檻するともいりてり背さうらみんや我が孝養の  
 たらざるを天より咎めたまふあれお慎みうやまふお如く  
 いかしと少しも恨み心おし繼母のこれを聞くよりいよ  
 く怒氣髪を貫く如く我と心を苦しめしが其辛勞の勞れ



おやまたの神佛の冥罰おや繼母のかりそめの勞さお臥し  
が時々刻々お病苦をまし晝夜も苦惱ひまもなくつひお三  
日といふお手足を張り兩眼を見詰て愚切たり孫八郎の最  
愛の女お再の別れ兄弟の悲歎たどふるお物さくやうく  
寺門お擧りて跡をどふらふお實や月日愁人お管らず日往  
月來つて百ヶ日おわたれば佛事作善丁軍お勤めてのち新  
靈お供したる餅菓を下げ孫八郎をはじめ兄弟親族等これ  
を頼ちて食するお次郎五郎のことお涙と共お餅を掌る  
おさげ懐んで今いこれなん母の關ものどうやまひ願さ  
喰たるお、わらわ心身惱亂し鼻口より鮮血を流し虚空を  
掴みたちまち空しくなるお其ま、不測や死体の口中より  
小さき蛇の出ると見えしが其ま、形ちの失たりけるつら  
くこの形容を考ふるお座を同じくして食したる次郎吉  
および親族お誰一人も災害さくひとり次郎五郎のみ命を  
絶しつまつた後妻の怨念おて死後お本意を達せしよや  
と兼人髪毛を奪うらしむ父の孫八郎の悲歎お堪うね我愛

若の離れがたく執念さふりき女ども知らで後妻と擧用し  
よりわたら男子を害せしお皆これ己が過りありと幼稚の  
次郎吉を名跡とし後妻の兄藤九郎といへるを後見とさし  
家事ことごとくこれおあづけたちまち剃髮染衣の身とさ  
り兩妻嫡子の菩提のためうつり浮世の塵を除れんと諸國  
順參お出たりとなんか、れお親類取計り此一石の碑を立  
て母子一遺託生の作善憐れあることならずや禪公のこの  
説話耳を聳て、聞了りさて此施主の何人なりや案内僧微  
音おて施主こそ彼伯父藤九郎なれざるお此頃國人の噂お  
うの藤九郎といへるもの其後次郎吉お後見の名のみよて  
家事己がこゝろまうせよさし愛妾數多召抱へ晝夜淫酒を  
事として歡樂十二分お二光を送る陸平藤井氏を倒さん  
風前の燈火おひとしなを聞けり禪公うちらなづき左こそ  
あらめおよそ祭奠お煩毒を和しこれを勤めて殺害するの  
和漢ともお珍らしうらすいんを亡妻小蛇とならん憐む  
べしこの小童惡むべき藤九郎とくの石塔お打むりひ本

性院賜知俗名藤井次郎五郎順生菩提と回向したまふ既お  
紅日西お落ち暮鐘耳おつらぬけお案内の僧のこゝより歸  
し二階堂と、も心静お下向道お赴きたまひしが禪公杖を  
どゝめ二階堂をかへりみ我志願のため斯く國々をめぐれ  
ばこそ此靈場佛地を拜され今哉空しくこゝを去らばふ  
た、お詣でんこと思ひもよらず今宵の風温くお月また清  
しおひねがはけい興院お登り夜と、も大帥冥助を仰ぐん  
ことを二階堂も願首おし貧道も同じ願心有がたさおぼし  
立いさへせたまへと身を翻せお禪公も喜悅たまひ世離れ  
し身いりる、おまた興院お登らせたまふ

○燈籠堂お通夜の事

井異僧と説話の事

禪公の入道と俱ふた、お興院お登り大帥入定の室前な  
る燈籠堂の椽上お座を下て心静お念誦したまふ鐘聲半夜  
香山雨散入前深楓葉秋と何ぞお詠せし時のごとく夜  
半の風の音雲間の月おけ心意を清す種となり心始しく念

福の折りら驚の山へだつる事や深うらん常おすむなる月  
を見ぬ候と打唱しつ、ひやうくとして來る者あり禪公  
二階堂をつくく見て客僧の何方より參詣ませるやこと  
お通夜の形容お見ゆるのいと殊勝あるおんことなり禪公  
も月暉おすうし見るお六句おあまひたる老僧なればねん  
とるよ禮をなし我の東國の産おしてかねて當山參詣の志  
願おしやうく今日と、お宿意を果したるが聞しお増れ  
る靈場佛地また來んことのはり難さよ斯通夜なせる處  
なり大徳お當山常住の人ならん彼の僧の頭を振り  
いなく、我も料殿行脚真如の月のをうしさお同宿の宿坊  
おまたせ獨こゝわたちもとほるなり免させたまへと操お  
腰けけ抑當山の靈場といつば釋の空海總持の出世五十六  
億七千萬歳のその曉さをまらたまへんと彌勤の實写を念  
じながら入定の戸を閉りくれたまふ真言秘密の靈山なれ  
ばたとへ凡俗の身ありとも一般の參詣すべきなるを況ん  
や法流お浴せる僧徒いりて拜禮なさるべきさても貴僧

ことり時めくやらん夜と、もお語りたまへ禪公ことたへて  
さんい我々元より一所不住の身ふわれべくはしく聞得  
ざるうへ去ぬるころ前執權北條時頼薨じたまへ今様風  
流さらふたえて佛事作善の外なけれ何取嚙子たる事な  
くは老僧うちうなづき實も左もあらん去るふても其執權  
たる時頼朝臣その身の武門の棟梁ながら佛門お深く歸入  
ありて供佛施僧のいとなみの大かたならずと聞くいり  
お禪公答へて我もりの地お留錫ある正しく見聞くことお  
りそも最明寺禪門の佛法神味をてお大悟し朝暮の勤行懈  
怠なく數ヶ所お寺院を建立し僧徒お供養なすこといと有  
がたき志ざしと感じたてまつる人もありまた傍らいへ  
るおの時頼武門お生れ得て既お天下の執權として國家万  
民を治めんするお聖賢の道の輝うして異端浮屠の教へお  
迷ひ破戒放逸の僧徒を辱み國用お充べき金銀を費し無益  
の寺院を新造せること愚なりと語るものもあり我その是

非をわきまへずいりおこれを辨せん哉老僧の莞爾として  
凡寺を建僧を供養するお二箇の差別あり名利名聞を離れ  
て一向お佛を尊みまた慈悲心の眞實おわくりに諸堂建立  
し施僧のいとさみあらんお飯令供養の引導師破戒無惡  
の徒たりとも昏さ街の燈燭のことく其善心奚ぞ必ず菩提  
の因とあらざらん我俊名聞お造寺供養の大師碩學の知識  
長老百味千果を奠供し香花莊嚴善美をなすともいさ、り  
功德の基おとならず唐土の往昔梁武帝達磨大師お問て曰  
く我寺を建る事一千七百ヶ寺僧尼を供養する事十万八千  
人まさお功德あるべきや達磨ことたへて無功德とのたまふ  
これ微心驕慢より起るを以てかく戒めたてまつるとな  
ん是理の佛法のみならず民を治むるもまた然りたどへ税  
飲を薄うなし倉庫を開き仁慈を施すも已が名利後業を思  
へば黎民かへつて後患を恐るまた一俵一緡の米錢だも惻  
隱差惡の信をもつてせば民みな是を歡樂すこ、をもつて  
見る時お儒佛笑を分理あらんや禪公此高論を畔が隨心膝

の進むを覺えずしていみじき大徳の教戒りなわへてまた  
問ふ時頼在世お判断ありし天下の政道若邪まを聞たまひ  
すや老僧ことたへて佛意のきくことを得たれども政事の邪  
正我これを知らずされ我會て聞事あり國家興隆せんと  
するるとき必ず禪祥の兆しあり國家動乱せんとするるときま  
た必ず妖孽あり然れば人の君たるやよし身と脩め徳を養  
ふとさひ妖孽りへつて禪祥となり邦よく治まり民安し若  
驕佚放恣なるるとき禪祥變じて災害とかり家くつがへり  
身亡ふ往昔商王紂がときお城の隅お雀巢を造りて卵を生  
じこれをお養ふお鵠となる臣下皆おやしんで奇とす太史奏  
して曰く凡小をもつて大を生ずる國家正お昌んなるの吉  
兆しと祝す紂王心お誇り我お徳あるがゆゑ天これを祐  
くと己が心のま、おせざる事なしりるがゆゑお天惡み人  
背ひて終おみりたなきひと、なりて國亡び宗廟を絶すま  
た殷王大戊の世お商の政やらやく衰へ諸侯お呼くもの  
多し時頼朝廷お桑樹自ら生じ七日おして枝葉繁茂し大

樹となる太史奏して曰く夫桑の郊原お生る、處なりま  
るを今朝廷お生じまきも枝葉盛んなるの禁闕郊原となる  
凶兆ならんと大戊大いお敷心恐怖したまひ身を慎み徳を  
脩め下を禮し民を惠むこと一年先王の政ことよた、び隆  
んふなり人民信伏し與狀貢をさ、げて來伏せること十六  
ヶ國こ、おわいて天下おはいお治まる是天惡むおあらず  
善らまめんがためなりこれを人民お養ふれば人の子あや  
まらあるるときお父母いりて之を懲す子其あやまちを悟  
り向後をつ、しむるときお父母の怒りたらまら解け舊おま  
して愛するがごとし若人君道なきとき天これを懲さん  
がため飢饉疫癘天變地妖山崩れ河濁れさま、あやしく  
ふしごと示す之を敬し之を慎むときお變じて國家昌大お  
らんこ、をもつて楚莊王の天變をばらくも不現ときお恐  
れ敬んで天お告げて曰く天其朕を捨てたまふりいりんと息  
りをいましめざるお歎きたまふ古今お尊ぶべき人主たり  
此こ、る時頼の心おありやしや禪公の心裏お恐れ聴い

りたまひふた、び問いんとまたま折うら兩人の徒僧出  
 來り彼の老僧が前へ頓首し師の坊すみやうみ歸らせたま  
 へ最早晨朝お近しと急がせば老僧の禪公おむうひ今夜さ  
 いはひおして古今を論じ異如の月の影を見たりうたみお  
 一所不住の沙門奇縁あらば再會せん魁めよや禪師願めよ  
 や此ときと禪公をふた、び見返りつ、また飄然と下山し  
 たまふ禪公の忙然とその後影を見送りたまひ名残ふたえ  
 す覺しければ彼老僧が跡を追んと遠わしく身を興したま  
 ふ折うら梵鐘の一聲耳をつらぬき目を開きて見たまへば  
 是なん南柯の一夢おして燈籠堂の柱お背を倚せ座前お袖  
 香煙をすそて香の匂ひ顔郁たり二階堂の公の睡覺しを  
 見て君前刻より睡眠なしたまふいりうさ山路の勞れお  
 やどわざと驚うしたてまつらす然と山嵐夜漏の恐れもあ  
 れば香煙を絶せず讀りたてまつるいさ、う疲勞をなぐさ  
 めたまひしおや公の入道が討らひを喜悅し今見し夢の始  
 終をかたりつらくこれを考へ見るお頼めやこの時の一

言ふ我時頼の字の舍めたる全く大師のおつげならめと信  
 心肝お銘じつ、さらば實前お禮拜なし早東雲の空近く草  
 葉の朝露うち拂ひ名残としくも當山を下りたまふ

○禪公美濃國へ到る事

井一男を徳し一女を救ふ事

禪公の辛勞おありす飲食をいどいで國々の山川中で潜行  
 したまひ今日美濃の國邊おいたりたまふ實や秋の日短景  
 く紅日いつしう山船お隠れ宿り鳥啼らお潜み誰彼どきも  
 早過ぎて比る八月廿三日宵闇の空のうら懸れハ星の赫光  
 だおへだ、りて一歩も前途見え分ねば禪公二階堂をうへ  
 りみ求むべき宿おの三里をへだて過ぎ越方も三里と聞く  
 殊も身体もや、疲れたれば今宵の松下を宿どなし一夜の  
 夢をも結ばんと櫻木ならで常磐なる松を主と座を定め引  
 敷物おの衣の袖笠を枕お夜もすがら念誦の外なうりし  
 お伏待月のやうやく昇るお左方右方を見たまへば卒都婆  
 五輪たて連なり手向の水お蛙おさ樹の葉おだよ鳴虫のい

どいありれお物凄さお容形この三昧おてありつるよ如何お  
 入道お覽せよ此世の仮の夢のうちつひお西方同行おれ  
 と生を訪ふもの、多し死をどふらふ者の少くたちおらび  
 たる卒都婆五輪みな苦むして驚うづら道まどいる、容形  
 いどふらふ人も稀おして大方の無縁おらめ憐むべし、  
 と入道もるども合掌なし南無幽靈出離生死願生菩提と懇  
 るお讀誦なしたまふ不測おかなたの草叢お怪しきまで  
 の物音し五輪石塔の物間、白き陰の散乱、とし且つ顯  
 えりつ隠れ或ひの突然と起或ひの倒れ其容体尋常ならず  
 怪しきおだん、お近く來て廣みお出すくと立るを目と  
 めて見れば甘ばりの瘦たる女襟短なる白帷子を着し四  
 度なき裳掻合せ爰うしと見巡らし禪公兩位を眩と見てそ  
 るくど走りより禪公の袖おすがり我を助けてたびたま  
 へど只慄々と震ふさま凡俗虚弱の輩たらんお驚怖轉倒  
 なすべしを強勇の二階堂大徳の禪公なれば些しもおどろ  
 く氣色おく汝が五音阿吽の息氣迷魂靈鬼の類ならず其爲

躰く不測なりいりある者ぞ始末をかたれ苦難を救ふの出  
 家の勤め邪正およりて助け得させん女お數回頼突て苦し  
 げある息をつぎあへず妾のこ、より十餘町あなた難本と  
 いよ里の者なり去ぬる頃より端なくも風の心地お打伏し  
 が日々お病苦の彌増り己お死べくおばえしが夫よりさら  
 お物を弁たす今不圖心おわれお歸り父母を呼ぶも話へなく  
 ことお寒冷のいふバウりなく四方と探れば箱の内おじめ  
 て我が身死して埋葬られしとおもふより怖さ悲しき遺  
 うたおく蓋と覺しき上の方を力を出して押のけしがさい  
 はひおして遺出ることを得あたり見れば兼てより見覺え  
 たりし三昧なれば夜陰のこと、いひ精力つきてなり、  
 いまの歩みおたし希おとくお父母お妾お蘇生しを告げて  
 たべと思たえ、お動靜おうたればお不便なり父母の  
 悲傷お扱こそとおもひるれうた、送りつうのすべしと  
 やをら座と立んとする折うら一人の悪僧三昧より躍り出  
 おのれ死損ひの女郎お通るとてのがせべさうと持たる棒



をより上てりの蘇生りの女をうたんとす二階堂其腕を腕  
と握りやよ待汝かれ何の爵あつて同生りしものを打ん  
どする哉彼もの利腕と奪られあがら入道を擧地と白眼い  
らざる瘦坊主の留だてりな集奴の昨日埋葬し亡者およそ  
墓守の法として一度三昧を送られし身埋葬茶昆の差別な  
くたどへ其期を蘇生すとも直ちよ打殺してこれを助けず  
若其亡者を活して歸せバ其墓所りあらず絶るといふこの  
ゆゑお墓を守る者新葬あれバ後四五日晝夜三昧を廻りあ  
らたひかゝる定法あるなれば今彼を斬殺さん何の仔細  
うあるべきを離せくとあせれども無双の大力お返られ  
し掌取る、ばうりお覺えしうバ柄懸すまふ左手して二階  
堂が異頼うたんとす入道其手をも丁とより兩腕奪お給ま  
ぐれば禪公りれと面をあひせ汝の幼名小次郎今空阿お  
わらずやかの者もまた目をさだめ我が幼名をまれる汝の  
何奴禪公の面を背け二階道お目したまへバ入道心得其ま  
、腋骨を丁と一舉おうんどもいとす息絶えたり二階堂の

標上引提三昧の奥は捨おきて驚お怖る、女をなぐさめ今  
の後易しうゆゆりと二階堂お手を曳せ静りおこゝを立  
たまふ二階堂のいなりしく斯ばうり仁愛を垂たまふ君の  
かの墓守よ死をたまふ其所謂の解けがたくひとらひこれ  
を問たてまつる禪公の莞爾として早くも息失たまひしり  
先年由比が濱邊おて父の誓討てる小童よ其とき後來をい  
ましめしお案のごとく殘忍無頼いはゆる世上の害おれバ  
早く暇をとりせしぞ穴賢とどのたまひけり斯てやうく  
瀧本おいたるその夜すでお丑刻あり愛なん我許と女のい  
ふお禪公表をほらくと叩く内よの父母が愛子の死別お  
ありし事ども插口説いまだ寝もせず佛名を誦し菩提を深  
くとふらふ折りら表を叩く板戸の音いふりしおぐら老母  
立出で誰そ何とぞ、答ひる聲お是の諸國修行の僧當家お  
鳴昔世を辭せし息女のことおより來りたり老母の不審り  
おもへども死せし女のことおより出家の來りたまふと聞  
き何とやらん胸騒ぐれ門の板戸を締めよ明て外面の容形

をうり、ふを待設けたるかの女板戸無体おおし明て母上  
喃と取りすがる死し娘の容貌見るよりいりでおどろりうさ  
らん覺えすわつと聲を上げ飛のきて庭おひれ伏た、南無  
阿彌陀佛くとわな、さ震ふ禪公微笑してさおおどろき  
そ是の小女かならず幽霊迷魂ならで死せし娘の蘇生りた  
るぞ老母の猶もおそるく女の腰足搔なでていりさま足  
元もたしうおわれバ幽霊さらで眞實まことお我が娘おて  
ありけるぞ其の夢お現り夢おちらバ千歳も愛などかき口説  
たぐひお手を組み抱きあひ嬉し泣きなきけるが父なる者  
も始終をまれ聞飛立ばうりうれしさをさすお兩僧の手前  
おて心をしづめ慰慰お座敷お請じ禮謝をのへ借其始終を  
たづぬるお兩僧および女も俱おありし事ども落なく語れ  
バ父母の憂みお願をすり若兩僧のいまさすバかの墓守が  
手お死してかく再會お得ざらまじ實お再生の恩人と手の  
舞足の踏をしらすこの隙お老母心得娘が靈供お貸ひ得し  
干湯波蒨鞠干瓢おさきいろくを表て湯漬と鞠お父のさら

お禪公おむりひ高惠およつて娘の再生明朝の宿坊に達す  
べきが彼意守が死をいりおりせん禪公の打笑ひ彼の己お  
定業おして三昧お野倒死たるなれば渠が事い述るおおよ  
はず只墓を穿出て歸らんとせしおさいはひ旅僧お出合此  
宅まで送られしとのみおしつとも我思ふよしもあれ  
ばりならず其許お子細いあらじ老父猶さら思惠を感佩す  
かくて夜も明仄と明わたれば暇を告げて立出たまふを夫  
婦さまと止めまゐらするを再會を契りてを別れたま  
ひけり

○禪公山中お迷入事

井隠者の語を聞驚く事

斯て禪公の所々を廻り越中おいたり行方しらぬ山中を覺  
東なくもたどりたまふお斜陽すであうくれ然も雨さへ降  
出たるお行先人里ありとも見えずいりいせんお笠を立  
て四方を見廻らしたまふおとるりの木間よりらららと火  
火の光り見えければ心嬉しく灯光を目的おやうく爰お

うおこれを下座するお天下を掌握すべき人我が家も近づ  
きたまふと裂れたり其修行者こそ凡人あらざれうや  
しく請じやせと命するを禪公腹をへだて、これを聞き心  
中ごとお驚きたまひ二階堂の袖を曳きて暗夜をさはいはひ  
足を早め此處おつまつと彼方へ轉び松吹風も人や追鳥  
鳴聲も呼ぶりとおそれ足をばりりお馳たまひやうやく程  
も遠ざうれば禪公はじめて心をやすんじ杖をたて、息を  
つき開れしり二階堂いふしへ人皇六十五代の帝花山天皇  
とやせしがかねて伊邇世の叙心深く殊さら観音薩埵の靈  
場三十三所を順拜たまひんと寛和二年六月廿三日の夜半  
ひそりお王城を去のび出たまひ計らず安倍の晴明が館の  
裏を通りたまふ隨従の士指先でこれこそ晴明が居宅なれ  
どやと天皇何の御心なく窓より覗き見たまふお時しも苦  
熱頃おれお晴明館お端居して涼しき風を待取しが不圖宿  
星を見て大いお恐れ今宵まさしく天皇の何れの方より潜  
行まします暫時もさしおがたき大事といそがひしく朝

至りて見れば荒れなる山守の孤家なりされど樹下石根お  
いまさるめれと柴結ふ門戸おたちより一宿を攝せんこと  
を乞たまふ内より荒布の襦袢あるを著たる殿男の一人た  
ち出てかゝる人稀なる山中ことさら雨の暗き夜お何人な  
るぞと答むるは禪公の腰を折り見たまふことき雲水の雨  
人跡の宿おて日高くりしも雨雲早く日を晚し行先とても  
不知案内哀れ一夜を恵みたまへうの殿男も容貌お似氣な  
く夫の痛ましき御事なり左におれお見をなはずとて壁  
崩れ屋根おぬれ我身をさおも入がたし今少し彼方お我  
が主ある者の庵あり是も破屋お侍れども己が住家お増  
るべしといさ案内なしまゐらせんと松明をもちて先路おた  
ちこいお幡木わり彼方おへ腰角なを介抱なして行程お  
よそ一町ばかりと覺しくて柴垣結圍し庵ありまばらくこ  
、お俵せたまへと禪公二人を門邊お立せ其身の入りて去  
りくと語る主と思しき聲さわやうお夫の能こそ勝ひや  
たりわれ今天象を見るお不審の氣色あらわれたるをひる

服を着し内裡へまゐらんするさまを見て天皇おゆるさ其  
所をのぐれさせたまひ晴明が其道お長せしを始めて感じ  
たまひしとや今彼山中お住る者もをさくこれお劣ら  
ぬ下笠己お我が數年の志願一朝おして破れんとせりいり  
ある者の盤せるならんと其名床しくおぼされけり後お聞  
くおこれおん天文博士磯野定久といふ者おて陰陽頭重雅  
と諍論おより双方とも解官せられしよりこ、お暫居せし  
となり禪公鎌倉お歸館の、ち彼定久を召し出され過し雨  
夜おいみじくも我が至れるを策り知る神機妙筵感稱する  
お堪たりとすなひち前官に任叙せさせ食膳許多たまひり  
て鎌倉伊所お留めたまひけり

○禪公佐野の庄へ到り給入事

井常世が宅お止宿給入事

光陰射る箭のごとく日月走る馬お似て今年も早く師走の  
中旬例もより雪の繁くして見るく四方の銀世界越べき  
峯も白妙の雲お閉たる心地して禪公の左お杖右の入道の

肩を力ふつもれる雪を踏分く外ある木蔭に立休らひ適  
ま往來ふ里人の國處の名を問ひたまふ下野國佐野の庄  
と答ふ神公入道おのたまふいひしへ中納言定家卿おし  
引の大和路なる佐野のわたりの雪を愛て

駒どめてそでうち拂ふうげもなし

佐野のわたりの雪の夕ぐれ

と詠じたまふそれの大和こ、下野處に異れ也實景幽吟  
爰お感稱あまりあるとまばらうイみ詠めたまひしが寒風  
凜々として肌膚を斷ち臘雪飄々として簀笠重く降どよる  
雪見るぐうち積るが上おつみて尺餘およべ何方を道  
ども分り兼ね最早一步も進み難けれバこの邊りお宿るべ  
き家居やあると右見左見一町許り彼方おこそ雪堆りく見  
えたるの如何さま家とも思われてやうくあ、お近寄り  
見れば萱が軒端の朽がらちお松の柱竹の垣夫さへ斜めお傾  
きたるの住人住べくも見えざるよ雪の鵝毛お似て飛で散乱  
し人の鶴踏と衣て立て徘徊すとうち誦する聲お人住るを

一塊柴一本も身おたくはへし物もなく袖掻合せ寒さを凌  
ぎ勿論明日の糧だも無く世も苦しきていたらく伊宿  
の免したまふべしと身を哭らたる夫婦が悲涙神公も憐れ  
どおぼし我が苦しさを人をお思はずまばし心勢掛けるの  
我過てりくよしさらば如何おもし其山本おいそぎなん  
ど夫婦お厚く禮を傲し眞袖の雪を打くらひ身を晒へし足  
重氣お二階堂お手を曳れ羅路くとして歩みたまふ容他  
見おさへも痛のしく夫婦の門邊お見送りつ、嗟呼おれ世  
よある時おらば一夜のみのりの十夜百十日飽まで供養な  
すべさをかゝる貧苦お堪りねて無下お斷る遺念おどの知  
りたまひで如何ばり邪見の者おや恨みたまはんこひね  
がのくお鬼も角まなし一夜を明させたまひんことをど打  
ち歎きたる妻のことお夫も同じ舊儀の泪の杉お氷柱を  
なし徒忙然と後陰隠る、までと見送りしが神公の尺餘の  
積る雪お行き悩みつ、爰彼お杖をどいめて立休らひく  
てのまた歩みやうく一丁ばかり行たまふ心の剛おま

よるこび雪お閉たる柴折戸お音づれ諸國行脚の僧徒なる  
がまらぬ旅路お降積む雪のまらぬ日陰のくれおんとす憐  
れ一宿をゆるしたまへどねんごるよ乞ひたまへバ四十歳  
ばかりの女立出で夫の扱こそ困じたまひん伊宿の易さこ  
とあがら住だおいふせき我が屋外お夢結ばせん便りもあ  
し左あれ主お問ひとべらんと内お入りて斯と告ぐるお五  
十歳ばかりの瘦れたる男足半とさて門邊お立出妻なる者  
がやごとく誠お見ぐるしき住居おて伊宿まおらせんも愧  
しけれ爰より十町ばかり彼方お山本の里といへる美さ旅  
亭も多りれば急ぎたまひ心よく夢結びたまひてよけん禪  
公の腰を折て疲れ果たる雲水の住しき床のいとよべきや  
曲て厚意を垂たまひ軒下をだま免したまひ、此お増たる  
悦びなしと猶ひたまらま乞ひたまへバ主の諸手を頼まあ  
て伊宿しきりさきりさく殊さら佛鉢を具したる兩位我々宿  
因つたおくてかゝる困苦お果ることもせめて來世の善縁お  
願ひても止宿ん本意なれど如何おせん斯る寒天水地お炭

しませども流石錦纏にまじりし伊身四肢も龜り肌肉も  
氷り苦寒心魂と貫きけるがたちまらだうと轉びたまふ二  
階堂驚きいだき起せと神心恍惚とし脚力たちろね雪中よ  
またも驚れたまふを夫婦はるうお見るよりも妻のあはや  
と聲と上々夫の見るお堪かねけん息をばりお走りつき  
二階堂おはりり神公を背お負ひて急ぎ我が家おともなひ  
歸り半朽たる荒篋を引りさね押ならし脊よりやをら神公  
を下したてまつれど未だ言葉おへも出したまひす思ざし  
もまた絶々あり二階堂の頭陀袋より香藥を出したまはせ  
てまつり脊を撫で胸を摩りさまゝ介抱なしおがら如何  
お女性 氷雪お凍えたまふなれバ焼火してまゐらせたし  
何おまれ燃べさものののあらざるやと乞る、詞お女の恥ら  
ひ前お夫がせしごとく柴一枝おへなさが磯嶺しされど  
も斯る危急なれば何かな焼火の料となさん鬼や爲ん角や  
と立まよふ折ら夫の一束の雪持る木をか、へ来てこれ  
を焼火とあしおめらせんと角なき石お凹みたる金打合せ

く心せられぬ附くぬる燈の走り火やうくと付木わら  
つして焼つくれば初めの煙る生柴もやうくと火勢盛んと  
あるを旅僧の傍もち行けば入道の禪公を抱き起し手足  
を暖めたてまつる女に心得焼火の傍は怪しきまでお埃  
びたる釣鍋をうけ置たり良ありて禪公のやうくと心氣我  
わうへり息脈離りおさらせたまへば世も暗しき形姿お  
て其許達が厚き情けもて絶へる命を保てること全く夫婦  
のたまものなり此思いつり忘却るべき主の頼み汗を流し  
見たまふべき茅屋あてまうも物ひとつあらざれば切こそ  
情面中せしうと豈計らんや寒氣お閉られたまひんとり  
微れたる荒庭も雪の中おのまざるべしと伴ひまゐらせは  
べれども夕酌たてまつるべき物もなしこれお粟の粥の  
侍るを妻なるもの、心して今の焼火を暖めたれば此がな  
食し召さるべきりと器を幾回となく洗ひそゞぎ粥を盛て  
兩位お出せば禪公の莞爾として是の珍らしき粟の飯嘗て  
我等が好物とて快くこれをおしたまふ夫婦のさらお取ら

いて其往昔の我等へ粟の飯の名さへ知らぬと好物あり  
どのたまふ事有がたさよと歎へば禪公あらため主おむら  
ひ先よ宿りを求めしとき折焼柴だふなしと聞しが今我た  
めとたまひりし焼火のいりであしたまふや妻も夫おむら  
ひつ、連の浮僧の何を哉焼火あなさんものさやと尋た  
まひし其ときも免やせんかかやと思ふ折りら柴をいだき  
て来たまひしを最いふりしく思ひはべると尋ぬる妻を主  
の白眼女のさし出事を正すの賓客へ不禮さりながら先言  
み似ざる折焼柴事をつつらり或はまた他お盛める哉の  
師もたまさんうは見たまへと仮起て側への破障子ひき明  
れば軒おならべし鉢植の三ツ並べたるが三ツながら真木  
根元より押伏たり兩僧のこれを見て扱ひ鉢の木を持たれ  
たるう主懸涙みみてさんい某しが世おありし程の謎さお  
いふ馬鹿樹好どの譬へのごとく生得鉢の植を好みつ、數  
百の花木ををる並べ四季の鉢めお飽さうしが一朝子細の  
事おより斯く懸居せる我が身お人の思はんはとも有れ

と親類友人お贈りしがかずくの其中お梅松櫻の三木を  
愛し今おちふれ朝夕の煙の代もなき身ながらなほこの  
三木お土養水酒さいつも常盤の色かへず榮ふる松お身  
おへでやつれ果たる我が袖の何時を春ともまらねども花  
實の時を逢へずと慰さかへるうめが香の袂おはよ白妙  
の咲の盛りのさくら花のせけ影を三ツの樹に愛うちわ  
すれ愛來せせ迎も二度花さうぬ我儂が春を待たんより大  
徳の危急お充まわらさば元より心お草木もみのりの種  
どもならめやと殊お此頃積る雪お正しく雪山の薪おどお  
もへば更お惜りらず焼火の料おさしたるなりと切ある主  
の志しお兩僧ふりくも感入り斯ばうり秘藏の鉢の木を  
己が爲お化したまふこと生々世々お忘るまじ倍も其許等夫  
婦のゆるまひ山おる人お見しお僻目うこひねがはくは其  
名を聞くん主頭を打ふりていさく吾儂等氏もさく腰山  
腹お浮覽せよ禪公おさねていりばうり包お隠させたまふ  
ども花の櫻木の色こそ見ゆれ何の苦しうさふらはめた

明白お名乗たまへ大徳お深く包まん後の世の罪重うら  
ん恥うしなぐら其古への鎌倉のお仕へたる佐野源左衛  
門尉常世夫婦がなれの果おていを兩僧心裡お扱こそ佛  
平太の物語りおおもひ合せを禪公の猶おぼし召すことお  
りけん夫のふしおさきり佐野氏の仁惠深き人と聞しがいり  
でりかおはよまて零落なりしを常世こたへてわが亡父の  
弟なる同苗源藤太藤榮なるもの頭人乗お因みをむすびこ  
れよへつらひ常世こそ健忘症を極したれば佐野の相續お  
しごとく領民撫育の任お堪えしりのみおさらず動もすれべ  
道お背けるふるまひありて人民こもく怨みを含み郷里  
殆んど治りがたし願くはしはらく某領地をおつりり常世  
を閑處お情を養ひせんと跡方もなき歎訴なし無体お某し  
を追出したつひお本家を押領せられしおり禪公のたまふの  
左まで無法を何おゆる鎌倉へ訴へて明白の沙汰お請た  
まひぬ常世答へて夫のおはせまでもさふらねを某が選  
の甲斐なさひ仁慈賢才を兼備したまふ時頼朝臣逝去した

まふ上りどもも明白もひもよらず如く自ら健忘となりて世の騒静をうり、いんあんと天晴月日を徒らお過し今此困苦も前世の業此世に宿業を充し後世の榮えを願ふのみあり如是武士の身ながら女々しきものと思さんう今もあれ鎌倉もしも伊大事ありと聞けは是伊覽せよと夫婦揃たち納戸の破襖引あけて絨の糸の爰彼處結び付たる具足を取し妻の錦たる長刀持出で地裂て用ひあさずとも素肌お盆るこの鐘とつて抛りけ錦たれども長刀とつて打かつぎ一番お馳参目差敵と指違へ討死さささいたづらお飢渴お堪えで死なんより何程武士の本意おれど無念の涙襟を濡せ、お僧の零落をわかれみ義膽を感じ衣の袖を濡したまひ元より其許の明白ある誠の月も村雲の少頃へだてありどもも纏て隈なく晴行ん必ず時節の待たまへと入道諸共いさむる折りら遠の八聲の鳥なきて峯の横雲晴わたり、お禪公旅の支度なし常世夫婦お厚く禮謝し名殘惜氣お立出たまへ、夫婦のさらお袖を濡しはじめ

惜みし宿ながら今別れの悲しくて門邊お出で兩僧の影見ゆるまで見送、お禪公入道こと更お數回跡を見返り、東國さして登りたまふ

○浦尾が奴僕廣川お乱暴の事

井浦尾が奸計廣川を陥る事

劍の利といへども屬され、斬す才の美ありといへども學ずん、バ尊うら凡四民其職ありといへども勤ずん、バ功とあさす宜うな前執權時頼入道道崇治國平天下のため雨露霜雪を犯し飢渴愛臥を凌ぎて諸國巡行の志願粗その功を還たまひ上野の國より武藏の國お筋を向けたまふ爰お野武の間境なる楠谷といへる山里を通りたまふお路傍お結々草の庵柴の扉も今暫し住ばりある軒の窓お香煙風お和して盡し念誦耳をうぐつて聞えし、お禪公の何どなく心耳お徹して殊勝お覺しけれ、お立寄て破窓よりひそくおさし覗き見入たまへ、お壇上お地蔵尊を安し六旬お關たる老僧一人餘念なく寶号を誦し心を澄すありさまお禪公

信心肝お銘し入道と、もは巷内お入りて老僧お向ひ三禮す彼の僧もまづお念誦をどめ座をおし直り禮を返し大徳と見たてまつる歴々のいりて貧道を禮したまふお禪公こたへて我々志願あるよりおまねく諸國を行脚せしおいまま大悟の聖お會せず今窓前を通りしお闍らすも香齋誦聲を聞きたちま心魂お感通しおばえずお禪位をおどるうすお至る希おはくはく貴僧の俗性および通世の善因を聞けん彼僧何おもひけん目を閉て答へず、お禪公再三尋ねたまへ、其おさやうやく目とひらき我お生來我お佛因いけん汝お苦提の種なる哉といひ棄て座を復し本尊お向ひて再びものいはず、お禪公この一言と聞けりもたちまち慙愧の色見えし、お二階堂の其無禮をいけり氣色して突立を、お禪公おどるき引といめ流泉岩お觸て逆し清風松を吹て聲あり我おやまてりく、と深く前非を悔てまづくとして庵室を去たまふ、必竟此僧何者ぞ其の後、お回お説と俟べし去る程お禪公のなは東南西北を順行し志願大方お成就なせ

お今、お鎌倉お歸りなん哉と入道と商議したまへ、お二階道の兼てより公の心強かりといへども三年を重ねし旅の空おさすお身心疲勞したまへ、お一向館を勤めたてまつるお禪公もやうやく決心したまひ、武藏路と登りたまふ、お同國小山の里を通りたまふお門塚立派お建たる家のいり、お成けん爰彼處、お門扉倒れんとするまで荒廢せし、お動形いりさま他より乱暴のていたらしく、お禪公杖立て之を熟覽したまふ、お内お痛哭の聲さへ聞ゆる、お禪公いよく不審なし、突と内お入て見えたまへ、お男女、お愁苦の色を顯し、顔を聚めて商議なせし、お兩僧を見て一驚し、お旅僧等何人おて何地より來訊なるぞ、お禪公こたへて見らる、ことさ雲水の徒今此處を過りしお門塚、お荒廢、お垣、お破正しく、お乱暴の形容、おお念のことおあれ、おこそ更またづぬるおあり、願くは、お始末を明分おせよ、お圓居し、うちより、お家、お刀、お自、お見えて、四十歳、おばり、りの、お女、お會、お釋して、夫、お渡り、お船の、お有が、おた、おさ、おま、おづ、此、お方、へ、お請、おする、おい、お昇る、おも、およ、おま、おじ、おと、お庵、お厨、お口、お腰、おかけ、おたま、おへ、お家



刀自ら進み出て此原を委曲中のべんいど永きことあら  
 べ詮することのみあらしくやさん抑も我が夫の當所の  
 郷士廣川貫二と申もの彼方有るわが郎女朝江とす一  
 人者春秋己二九の春を迎ふ斯絶なき田舎女なれどさ  
 いひひ婚を乞ふ人多りれども家と嗣べき男子なれば他  
 お嫁せんことを辭れるおさらば何某の息呉がし弟と紹  
 介の人もまた澤なれど貫二物堅き質めて老實仁慈の者な  
 らでハ望がねなざしと果さず爰又隣村の郷士浦尾丹  
 吾といへる者まきりお娘を乞ふて止せ望取といひことお  
 また丹吾が其性正直ならず斜邪非道數々なれば固く辭し  
 て取敢ぬを集かねて意恨とせしハ一昨夜更闌て門打た、  
 多數人の聲して榮治をかへせ睡て戻せとの、しり騒ぐ夫  
 をはじめ家の奴等一圓其意を得ぬかれハ何者かれハ斯  
 騒々しどや其いふことも分ちがたくことさち夜中のこと  
 されハ翌日こそ來れど答へさせしハ何翌日ならでハ戸を  
 開じ左あらハ打破つても返答さうんど松千切木もて見た

まふとどくたちまち門塙を破り乱入す家の奴僕もこらへ  
 得ず同く得ものを引さげて強くこれを防ぎしハ門内ま  
 でハ乱入すれど家裡までおのよハすして一齊ふさつと  
 引と得たりと奴隸等追んとするを夫つよく戒めて破たる  
 門扉を閉さんとするハ一人の男園内お籠れりよく見  
 れハ外人あらで浦尾が別家の手代なり其死相己お日を経  
 喚氣さへ鼻を穿つ是ハ浦尾が仕業をしり即時お使を以て  
 言しひるハ今夜存外の狼藉といひ利さへ死體を我ハ門内  
 お棄置こと其意を得ず早くかの死骸を引取狼藉の趣意う  
 けたまひらんと述べたるハ丹吾使お出會て狼藉無道とハ汝  
 が主人一昨夕榮治を使とし女を娶らんことを求めしハ承  
 引せずんハ爲ぬまで何ハゆるお使を打擲せしど榮治  
 歸つて此むねをのべ打れし痕の痛疾お堪りね四苦八苦し  
 て息絶たりまた今晚の始末とハさらハ我ハ知る事ならね  
 ぞ察するところ同輩の奴僕等集が非業の死をわハれみそ  
 の罪を問へるならんハかへつて我を狼藉とハ奇怪千萬の

中條此うへ徒よハ止みたく早く歸つて斯言へよと立蹴  
 ろふ動と蹴倒せハ使ハ怖れて走歸り其いふ處をつらふと語  
 るさすハ寛仁の夫貫二も其仕業の無頼をいりり明朝ハ領  
 主おうつたへんとするハ其夜ハ丹吾談訴せしハや今朝と  
 く歩卒の群來り一言の問答おもよハす夫を高手ハ縛め  
 て其まハ引て歸りたり夫ハ元より無冤なれども如何おせ  
 ん彼丹吾ハ鎌倉評定衆ハ内縁あれハ領主すら常お彼を  
 恐るさらハわが夫いりハ陳ずるもいりで明白の裁斷な  
 らん極めて無冤ハ天壽を棄たまハんと涙をおさへて始終  
 をうたれハ禪公不便お思しなぐら左お歎きおもひハ神佛  
 のいりで正きを助けさらん吾僧等由縁おしといふども  
 りハる無冤を無下おせん哉我たハちハ領主の許ハ行主の  
 助命を計ふべしハならん悲ふることありれどのためハ  
 家刀自娘ハ合掌唯々よさおはらひたまひて夫を助けて  
 たびたまへと涙と共おこひねがハ奴婢等これを聞くより  
 もたハ大徳の慈悲を以て主人を救ひたまへりしと士おひ

れ伏こひねがハ常々慈愛を施せし貫二のふるまひさハ  
 察知らる斯て禪公入道を將て領主市坂權之丞が許しハた  
 り我ハハ一所不住の身直訴せん事あるハゆるおわさく高  
 位を驚りせりねがハハハ面會あらんことを權之丞いハ  
 しなぐらたら出てたハハハ初會ての應接了りて禪公ハ恩  
 懃お貧道ハやすすども雲水の身ハ今日計らすハ廣川氏  
 の門前お立て鉢を乞ふ處女兒打集りて懸涙お沈む其故を  
 とハハ云々と聞ハ不便お見るハ忍びざるゆるお領主お見  
 えて貫二ハ罪名を問ひたてまつるのぞむらくハ彼をたま  
 へることを得ん哉權之丞心理ハおもよハ信哉廣川の類族  
 が僧徒を頼んで助命を計ハ天晴活命の報謝あらめとハそ  
 うハ喜悅し面を和らげ其ハ貴僧の大慈尊くおぼゆされど  
 丹吾うつたへ正しくして貫二の答ハ胡亂なりりるハゆ  
 るお己ハ貫二ハ解死人の罪名遁れがたし云し貴僧取てま  
 た助命得させん意あらハ我また意してこれを計らん禪公  
 ハ其厚意を謝し凡人命の尊きことハ貴賤高下の差別なく

謝禮千金をもつて換へさるる權之丞の笑みを含み左らに貫二をあたへんと笑と身を起すを禪公とてめ見たまふこと貧僧をも殊さら諸國願參の身我たうちお鎌倉お赴きこれを謂へ今日より五日を際限となし人をして贈るべし其期まで貫二を質とし預けんりならず鹿略おしたまふべからず權之丞心中相違すれども幾り五日の間なれば誰々おこれをうべなふ禪公猶後來を約して立出たまふ禪公いなる深き慮りある期て禪公道をいそぎ翌日相摸の國分寺お着したまひ笠深々と引うつぎ本堂の縁お休らひたまふ

○時頼禪公鎌倉歸館の事

却て説鎌倉の執權相摸守時宗朝臣青砥左衛門尉と志を合せ政事を明白し法例を正し上お尊嚴を厚くし下お慈惠を施したまへば上下常鎮お天日をわぶき境を撃の樂みをあすところお昨夜何かたともなく青砥が第一封の飛札を呈するものあり家臣等いなりしく思ふといへども墨黒お直覺とさへ書たれば其儘主人藤綱おたてまつる

藤綱豫りじめ之を知りたりけん謹んで押籠り開封してたちお夜を犯し北條亭おいたり時宗朝臣お拜謁し伊父時頼志願成就し明日歸館の赴きを言上す時宗朝臣お兼てひそりお藤綱より聞たまふ處なれば歡びのあまり出迎へんどのたまふを青砥これを押しとめ君御出馬あらんかへつて人民驚動すべし願くは臣お任せたまへさらば汝過不及なく其節を計るべしとたうち近臣お其設備を命じたまふ近士の輩ら青砥が言上今また執權が命を聞面々いりでおおるうざらん夢お覺見る心地しておのりお椀の瓶をかへげ素袍の袖を括りおひせ彼方へ馳り爰方へ廻り男女奔走いふばりりなく時の間お莊嚴設備善美を盡せり青砥藤綱私宅お歸り翌朝わづり召具し十餘人素質もつをらお立出でんとす藤綱が長臣等これをいさめさまがお前執權の御歸館おれは路途非常の警衛かたへ召具數多嚴重お出立せ公の御乗輿をも備へたまはんや藤綱微笑しもつもの中條去りながら我がおもふところわれは其設

備おひかよふまじと其身も歩立おて立出らるる去るはどお時頼朝臣先年逝去ありしといつたりおて日本を順巡し國々領主および士民其善惡を親ひたまひ今日既お歸國したまふ赴きたらまら鎌倉中お聞えしうら諸侯お家人の面々いりてこれお驚うざらん半信半疑なすところお早く藤綱お迎ひお國分寺まで至りしと聞き云ひ合すとさく我もくど人馬立派お装ひてお迎ひお馳る者引もさらす農工商の天お悦び地お喜びいりなれば我々おかゝる時節お生れ合てふた、ひ昔の春お逢ことよとたかひお芽出度くど元日の慶賀を述ぶることお老若男女勇みおいさみ將哉三年經おて仁君の尊顔を拜まんど老を助け幼なきを懷き歸館の路頭お疊々たり斯て左衛門藤綱お道をいそぎて國分寺おいたり見れば禪公お行脚のま、本堂の縁お腰うち掛二階堂とともお物語りしたまふお藤綱從者を門外おどめめ獨り階下おいたりて低頭すれば禪公お世おも嬉しき氣色おて將軍御所お安泰あるや汝も勤勞満足どのた

まへに藤綱お禪公の容貌麻瘦したまふを仰ぎ見て只さめくど落涙し緒々とのみお詞を發し兼ねぬ二階堂階下お馳下り藤綱の手をとりて俱お落涙なしたりけるか、れば諸侯昵近の面々おひく當寺お馳參し門前お馬乗捨て堂前狹しと何公なし門外お數百の從士馬の嘶さ夥しきお當寺を守衛孤獨の住職元より少く耳聾さか斯ること、も露をらされ此物音を幽お聞き何事ならんとうりお多くの武士堂前お群集し縁上の旅僧を守護する容体罪犯人の露顯して取圍まるとやおもひけん矢庭お戒杖を引提て本堂内より躍り出禪公を撲地と白眼遺哉是の雲水等胡亂穢けある醜容をして堂上を穢し寺院を騒がす賣僧奸盜早く寺内を立去べしいりお囚獄官の人々お願はくは寺地を除て門外おて擲めてたべと戒杖取伸べ禪公をわいや縁より打下さんとす二階堂縁上お馳上り住僧を取引伏せ聲あら、げ執權北條時頼公を見忘れたるやといふ聲の頭上お雷の落るりと覺えたちまち魂ひわが身を離れびつ

くり驚天轉々と椽より階を轉び落ち仰向お墮と倒れなから目を開き見れば藤綱が膝下また胸りし起んとすれを五体麻れて動き得ず助けたまへと倒れながら喚く禪公微笑したまひ住僧免すと宣まふ聲心魂おや徹しけんやうく魂ひ我お返りおちくと起上り砂上は低頭震ひる藤綱さらお言上するの長途の疲勞ましまさといへども態と車駕をたてまつらす然しなから尊慮のほど如何あらん禪公莞爾として賢きはうらひよく我が意おふなふ北條亭まで抖駭行脚いさ二階堂來たまへと其ま、椽お突立たまへば二階堂のかしこまり浮脚お下せし負を負ひ後邊お隨身す藤綱免許を蒙りて先供お立て懸衛す禪公の殆染たる苦の衣は竹の杖脚半草鞋取も換す心かるくと歩みたまへば浮遊へとて馳あつまりし數百の諸疾昵近衆公の形をお驚りて乘輿駿馬を遠ざけつゝ皆徒立あてうしるゝ願列る衣紋立派の人々の中々人目の妨嫌て脱も更たら風情なり俟設けたる貴賤老少歸路の左右お充滿せしけ難きめぬ

と一同お膝を折伏頭を下げ密は公の尊容を拜するお山嵐海潮お顔色黒み苦難動行お容姿麗れたまふを見て嗟呼常お錦纏と緋綾羅を枕とし玉樓殿に起臥したまふべき身を人民快樂なさしめんと三年の間憂難難と知らずして我々の夜々お枕を高く足を伸せしゝ冥加の程も恐怖と心なき匹夫匹婦も涙を流し合掌せ伏拜まざるゝなりけり

○國々の四民正邪賞罰の事

井市坂權之丞の事

抑も最明寺時頼入道正嘉二年の春鎌倉を忍び出正二元元年文應元年の秋まで三ヶ年諸國を經廻し四民の行狀を探りたまふお探題目代領主をはじめ無道奸惡の徒ら三百四十餘人を記帳し時宗朝臣青砥二階道其外領人評定衆連座おて科の輕重を判斷したまふ諸國お召狀をもつてこどくく鎌倉お呼び登せて善惡邪正明白お糾問しあるひお追遣したる遠島そのはなはだしき死を賜ひ刑を加へまた實跡廉直あるひお忠貞の輩おの褒賞加恩またお再任

相續なきいづれも慈惠を施したまひまた明人評定の輩らおよび昵近の衆中依怙の沙汰最負のはうらひせし者いそれくお盤居逼塞なさしめたまひ勸善懲惡ことお嚴重お賞罰ありしうりかねて其奸曲を怨むといへば北條の近士また職任をおそれ齒を嚙下めし面々も積年の怨恨一朝お散じまたの私曲の頭人評定お堀へつらひし輩らの往事を栗れ後來を慎みこれより諸士正風お歸しかりそめの出入りをもこと分明お弁じ理非潔白お裁判なせば四民たがひお和合あし己を慎み人を敬し有がたき代となりたりける爰お武藏のかたいらなる市坂權之丞の廣川貫二が活命の禮謝千金を以てせんと約せしより日々指を屈めて晝夜をかどふるお第五日おあたりしうり今日こそお千金を得めと依はせお人あつて告げるの最明寺殿二階堂を召つれ修行者と容形をやつし國々の領主の邪正を探り當國より目出度歸館したまひぬと聞より權之丞大いおおどろき猶その風姿形を聞くお過日の修行者お紛れおけられおゆる

ひ傑起つ居つ貫二を早々家お歸し妻子珍寶をも打すて何國ともお出奔す斯る處へ鎌倉より貫二丹吾等を將て權之丞おまゐるべき召使の來りけるお權之丞の出奔し丹吾も續いて懸電せしりお召使お官と計り權之丞が梓彦太郎おなしく女房廣川貫二丹吾が女房手代榮治が女房等と引て鎌倉お歸り兩人出奔のよしを言上す禪公出座おつて榮治が女房お其死を糺したまふ始めの兎角お陳すといへども禪公の威勢お恐れ夫榮治永く癡症おて病死せしを主人斯々せよといひつけお是非お偽りたてまつると白狀お言上すれお左あらんより始めより知るこれ死をもつて生をむさばる奸計ことさら人家を顛破の罪輕うらず丹吾の遠島家財没収せしめられ權之丞が幼稚の粹女房おのたまふお權之丞儀一郡の領頭とし人民撫育の心なく罪なき貫二を罪ありとしかへつて丹吾を罪なしとしおと大切の人命を私しお金錢お代ること無道とやいはん人外とやせん極めて死刑たるべきところ其身のおやまをちを知

て亡命せしむるは、その罪をつくなくも似たりよつて  
 死罪一等をゆるして逐電のまゝ、遠島に付け家財没収せし  
 む去りながら我貫二が活命の謝り千金を贈らんと約せし  
 されば、そのうち市坂が田圃家財あらためて、簡男あつたへ  
 家名相續中付べしむつとも千金不足あらんまゝ、丹吾が  
 田圃家財二つ別ち其半を加ふべしまた廣川貫二こと兼  
 て行状老實おしてもつばら仁慈をばとすがうへ今度丹  
 吾が奸計お羅り縲絏の中ありながら其理りをあらそひ  
 ずして死生を天お任するその温順のふるまひ感ずるとこ  
 ろ其褒稱のため且つまた門塙修造の費として丹吾が田圃  
 家財どう半を汝おあたふべしと理非明白の傳下知お市坂  
 廣川兩家の者有がた源を絞りける

○佐野源左衛門本領安堵の事  
 井佛平六肥田を賜はる事

爰おまた上野國佐野源左衛門尉常世同く源藤太藤榮大和  
 國なる佛平六等を召出されまづ源藤太が罪を買へ遠き追

遣お處せられすなりち常世を原のごとく本領安堵せしめ  
 又何よりも切かりしの大雪お閉られ人事をわうたざるを  
 救ひて我が家お負ひかへり焼火の料お秘藏せし三の鉢  
 の木を切て充し其志おしの切なること何の世おりの忘る  
 べきと二階堂入道と諸どもお青砥以下評定衆お其始め  
 しうへ、お其終りの好様く、お其時の容許限なくかた  
 り此恩賞として本地の外お加賀お梅田庄越中お櫻井上野  
 の國お松枝庄合せて三ヶ庄を下したまふまた佛平六を  
 召れ汝常世が舊恩我が幼稚の微惠を忘れず兩人が肖像を  
 持佛おりけりつとも古主をおもふ切ある志し是また感ず  
 るお餘りありと公自くら彼が老實舊恩を報ずる始末を常  
 世おかたり兼て用意置し彼が黄金今般の歸宅の費お充て  
 永々佐野の家臣とすべしむつとも忠心厚き褒稱として平  
 六お肥田數十町をたまふ常世平六公の恩惠を感佩し直ち  
 お舊領お引移り平六の字を其まゝ、性号とし佛平六郎と名  
 乗主從慈惠を下お厚ふせしり、お領民自ら繁昌せり、お美濃

の國の三昧おて懸へりし女を救ひたまひし時、墓守が定法  
 なりと罵りしを憎みすなりち藤綱と商議なしこれお類せ  
 し流弊百ヶ條を書出し其第七ヶ條目お凡墓所おふいて懸  
 生の者たどひ古來の法たりども私しお殺害すること非道  
 の至極といふべし重ねてかゝる無道あらば其身の死罪從  
 類までも曲事たるべしと堅く制詞をたて、諸國お是を繼  
 たまふ美濃國の領主この條目をうけたまひりて、切り領民  
 の女を救ひし、神公おして墓守がふるまひを憎みこら  
 したまふ處ならめと是彼を考へおはせ舌と巻てお怖ける

○神公老僧の物語を聞給ふ事  
 井原田常直歸城の事

神公追々諸國の士民賞罰畢てのち下野の國なる老僧お使  
 節を厚ふして北條亭へ招聘し應接了て神公の曰く去ぬる  
 頃我貴庵おいたり大徳の生國および佛因をたづねしお一  
 言の返答我懇愧お堪たり然れども貴僧が容貌をづらく  
 案するおさら、平民の産ならするがゆゑお取て納これ

を問んとす願はくはつばらお聞せたまへかの僧流石お  
 せろきて我眼昏ふして神公を察知すおもひざるの不敬陳  
 謝するお辞なくさいひひお高免を垂たまふべし貧道が父  
 の鎌倉殿の譜代の臣筑前の國の城主原田次郎常直が遺腹  
 の倅なりと言上す時頼おせろ其常直とさへる、我さら  
 ん知らず汝その由来を知るや彼僧さらお流る、涙をおさ  
 へ貧道未生のことなれど亡母の物語り聞るまゝ、あらく  
 言上仕つるべし其ころ、建久年間故右大將頼朝卿治  
 世三代將軍實朝公いまだ千幡君と稱せし頃夜々殿の屋  
 根とおぼしく怪異の聲ある度毎お醒れ給ふことし、お  
 あり然りるお我が父常直の射術名譽を聞しかよ、お鳴弦  
 つりまつるべき由命じたまふ常直面目身おあまりすなり  
 ち曇目の神法を以てたちまち妖怪と退けし、お若君お惱  
 平愈まします頼朝卿御威のあまりお召替なる白糸威の鯉  
 お行光の太刀一ふりをたまひり目出度歸城おさしめたま  
 ふされお常直が射術の名いよく、世上お高くして西國の

諸侯武家の盛ら悉皆父不隨順せり去るお隣國筑後の城  
 主山名筑後守好秀といへるの代々射術の家にして鎮西の  
 てい我より外お取ものあらじと誇りしよ今般の鳴弦常  
 直お命下りあまつさへ首尾十二分おして錦をかざりて歸  
 國せしと好秀遺恨おやあもひけん建仁二年四月廿五日好  
 秀自國の軍勢二百餘騎おて不意お常直が居城を圍み一言  
 の問答も無く短兵急お攻たつる常直も家士を下知して、  
 と詮度と防戦すれども集の晝夜又訓練の軍兵味方の不意  
 の防禦おれつひひ一方を攻破られ今期よと見えけれ  
 ば常直お母おややう我が運命もこれまでなり其許さい  
 はひお懐胎たれば何卒常城を落延て産る子の男女どもひ  
 そりお養育長人お我が遺念を晴させくれよと俱お冥途の  
 魁せんと死を極めたる母をいさめ腹心の郎等お託しや  
 うく城を落延させ今心易しいささらば最期を潔くな  
 さんどて既お自害せんと做しお流矢來つて常直が右の臂  
 おくさ立を遺哉何奴と左手お其箭をぬきすて太刀取直

せと痛手お腕力甲斐あき折柄早敵軍のみだれ入り山名が  
 郎等小野九郎行安おあへさく生捕れたまひたり殘る味方  
 の軍兵の大將討れたまよとおもひ我劣らじと敵兵を禦  
 ず花々しき合戦しことごとく削死なしたるお山名はな  
 も軍兵お下知し城を燒立灰燼としさて常直を牢興おて當  
 鎌倉お引來り好秀評定所お言上せる隣國ある原田常  
 直君命よよつて鳴弦つりまつり天晴の勳賞をりうふらん  
 と計りしよ其思功の薄きを怒り反逆の色を顯しせしう  
 強大おらぬ其うちと自國の勢もて殊伐せし旨披露するお  
 頭人評定衆もいりありけん虚實邪正の決断もなく其  
 ま、常直を獄舎お籠らる借わが母の郎等の助はるく  
 山城の北白河おいたりこ、お隠れて月日を送り秋八月お  
 某しを誑み幼名を龜藏と号けとやうくやとして養育られ  
 漸々某し十年の秋不圖母心地なやましく日々お累歳の疲  
 勞おれやがて實客お員へんとする其枕邊お貧道をまねさ  
 先より述たる父の業性身の成行を初めてりたり父の遺命

とまもらんこと元より子たる者の道なれと杖と頼める郎  
 等も夙お死し我も命期の近ければ明日の孤獨の身となら  
 ん殊さら父が仇ある好秀外お犯せる罪ありと遠き嶋守と  
 なるお聞お如す汝の出家なし大悟大徳となりたまひ、九  
 族天よ生ずる佛敎これお益たる孝養なしとくれと命じ  
 て果身たりき己幼心おおもふやう父のいつくしみの高け  
 れお生來母の養育おてやうく東西を覺えたる身母の遺  
 命守ること矢張父への孝ならめと自問自答お心を決し泉  
 而寺の長老お隨從し一向修善の功を積み十五歳の春得度  
 して我お可もかく不可もなき不二房と自稱なし十八歳の  
 春よいたり抖擻行脚の身となりて靈場佛地願拜しまつ九  
 州筑前おいたり父が居城お登り見れば絃管變じて山鳥の  
 弄お成る綺羅留まりて野花となつて開く有爲天變の世の  
 容形を觀じ夫より東國を經廻し今住む庵の荒はて、本尊  
 の香花さ、ぐらものなく蛛絲内陣お羅網を張り鼠齧尊前  
 お盛りて供のごとよお錦よと、め朝暮延命尊を念じ父常

直世を辭しお上品上生の佛果を得せしめ若いまだ此  
 世おましまさば一度逢見んことを願ふより外なくいと言  
 上し衣の袖もて泪を拭へば公もをりるお流涕なし去ばこ  
 そ初めより凡人ならず思ひし天晴武士の胤ありけりさら  
 ば常直の生死を糾さんと青砥藤綱を召され常直が始末を  
 語りたまひ谷々の獄舎を探らえめんとす藤綱うけたまひ  
 りつ、しんで存じ寄ざる大徳の俗姓うけたまひつて驚き  
 入りもつとも獄を索るおおよし原田次郎常直いまだ存  
 命つりまつる將面會を做させんと郎等おえうく命すれ  
 ば程おく八旬お更たる老法師藤綱おすたり庭上お來れば  
 いうお不二房大徳此老翁こそ常直なれ生前の父お對面お  
 れと藤綱が言葉お不二房の標より合破と飛で下り我こそ  
 法師が子お不二房とや者なれと常直が衣お起り潸然と流  
 涙するお常直も遺腹の我が子と聞より愛着の絆お曳れ不  
 二房が脊を撞撫て舊懐の涙袂おあまりけり藤綱藤綱  
 おむりひ汝いうおして常直の細末をえる哉さんい某し嘗

て評定所の寶録を点検するお常直の一條始めあつて終りを記さずするがゆゑお密お人をもつて谷々の囚獄間を探らしむるお朝比奈ヶ谷お永龍りの老賊一人あると申すなほち自宅に呼び出し其實否をたづねしお始めの愧らひ告されどもねんごろの尋ね黙止がたく哉次郎常直なるを名乗其禁獄の始末を聞ども今あきららうお正邪を糾さば公いまだ御未生前にてさらお知ろし召す事ならねと恐れながら故右大將家および義時朝臣の御政道明白ならぬを今さらお世お觸知らすの理お當れれば既お奸敵山名好秀天の冥罰其身お下り願家卿の御密意お粗せしことの露顯て隠岐の島守と枿果しうへいさらお常直遺念も有まじうたく以て此まゝお天啓を安々つくさせんと獄會と稱し一席を結びこれお朝暮を隨意せしめしお當計らん哉遺腹の子おらんとし此上の兎角ども公けの判決お任せたてまつると理非分明のべられれば公不二房常直も藤綱が政事および君忠慈惠を兼し全計を成じすなほち願公あらためて我

今般諸國を巡行しかく革命の折うらなれば不二房が純孝および大徳お免じて常直が先非を許し常直も本領安堵なましむべしと言を正して命じたまふ常直法師の再拜し君命許するの恐れされども臣の八旬おある老老一子の既お佛門お歸入して外お嗣べき男子なしこひねがはくこのまゝお餘命を安く買へんことを願公のうち黙頭もつどもの中條あり去りながら私おまた思ふむねありいり藤綱汝が次男を我お得させよ我が養子としてまた常直お與へ原田の名家相續せしめお如何常直藤綱諸どもも深き慈惠を感佩し兩人等しく御請を申上すなほち藤綱が次男十五歳あるを願公自ら首服を加へ原田次郎時直と名乗らせ常直法師は賜られお急お城郭を造營し故郷へ歸る錦の袖よ若木の花の香をそへて筑紫の國お春をむりふ不二房の精年の懇願おなりて生前の父お違事もまつたく如來の本願と深く佛恩を拜謝しつゝ、本より行學勤修の聖才すみやうお三界の火宅とのがれ永く九品の淨土お生せ

んことを願ひすおち下總の舊庵お歸り朝暮おこさひ澄しつゝ、弘長三年お大往生を遂じとなん

○時頼禪公更お法制を建らるゝ事

時頼禪公國々おいて見聞の士民夫々賞罰嚴重おあしたまふより召お預らざる管領探題領主代官よいたるまで今日哉召るゝ明日哉罰せられんうと己が所行を自うらかんがへ猶後來をつゝしみて他よりも自國の税賦を薄く人より領民の困苦を救ふがゆゑ國お怨むる士民なく家お空しき夫なく太平の瑞色こゝお顯れ日月星辰も光輝を倍がごとくおして疊らぬ御代となりしうば禪公の猶二階堂青砥其外頭人評定諸職役の面々をわづめ我いやしくも青砥が一言お發起し三年お間國々順行しお不仁不義の輩多くやうくこれが邪正の實耐すまわれどもなほ外に正しくとも内は邪あるときまた乱るゝ甚およして禍ひ蕭牆の本おこらん既お頭人評定以下の面々内縁また内賄賂おより依怙の執成せし輩みな悉く逼塞せしむ

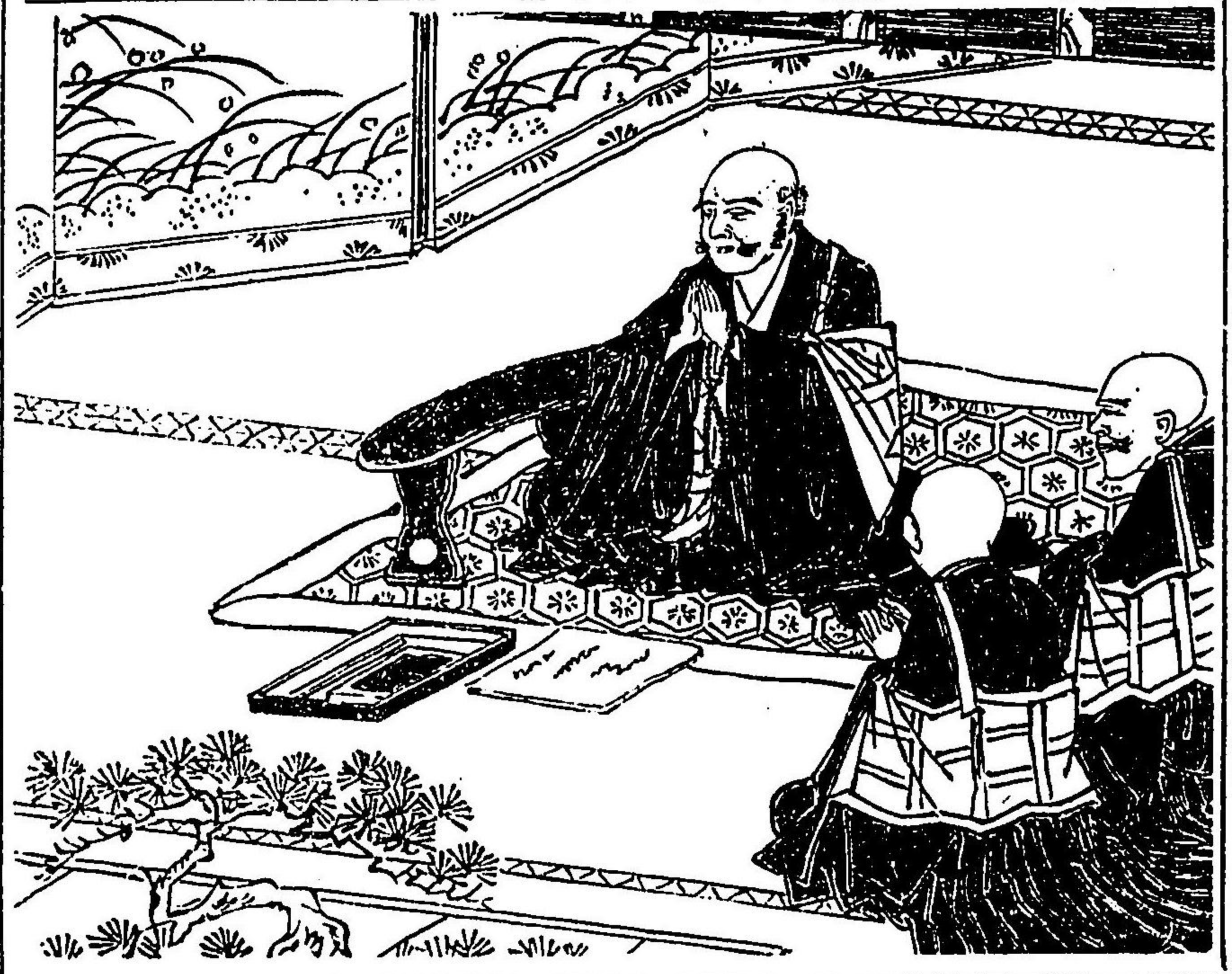
今出勤の面々おいていさらお不義の臣おらねど如何おせん五慾のおははれあるを希く賢聖の教戒を守り事々其理分明ならんことをさてまた義時朝臣の定めおくれたる奉行頭人評定の輩たゞ往昔より連聯せり一家一門お限るべうらす當時智慮あつて然も勤學し老實よして尙慈しみあるを撰み出其職役お補すべしと定めたまふしうるお近年のこれお戻りその補その任を家の職とし子孫愚鈍よして理非を弁せずあるひお奸佞よして依怙ありども同僚また制し退ぐることを得ずうるがゆゑお事の愛およぶ自今以後舊制お復古たどひ連綿たる家格なりども不學不才の者の憚るべくまた下劣微々ある者ども任おたゆべきの登庸せしめ日夜國政お怠慢有べうらすとねんごるお戒戒し兼て定めおる新法制二十三ヶ條(長文おられは、お略す)を藤綱をして讀しめたまひ連署の起請文と召されしうば奉行以下の人々も謹んで肺腑お銘しこれよりうりそめの私曲もなく制度もつばらお行る愛お弘長

元年十一月三日從四位上前陸奥守重時朝臣行年六十四歳  
 而して卒去る法名極樂寺殿とぞやける此重時義時朝  
 臣の三男ふしてもつばら仁義を守り政道正しくつ神儒  
 佛の三教を學びて賢君と稱せらる身も無常の風尊卑を  
 ばす一朝の風賢愚を管せず空しく一基の主とならせたま  
 ふよと四民諸ども惜みたてまつる將軍宗尊親王ふもこと  
 哀悼ましくて追悼の和歌をさへたまはりける抑宗  
 尊親王の敷島の道も秀でたまひ朝ふの八重垣のもと心  
 をよせられ夕ふの淺くらぬ山の井の水もおもひをうつし  
 春の霞の衣も芳野初瀬の花の梢をしのび秋の露の籠も頂  
 磨ありしの月をかこち柳本山邊の舊さいふしへと學び定  
 家隆の新たなる今の軌ふしたたひ常の詠吟詠の窓を  
 離れたまはず去ぬる建長五年より正嘉元年ふいたるまで  
 詠吟有りし和歌を集め初心愚草と名号たまひまた今年出  
 詠の内より三百六十首をえらみ出前民部卿爲家賜ひし  
 み彼卿もよりく感慨せられしとや

○最明寺禪公北の新亭お籠り給ふ事  
 并逝去の事

月去年來つて既弘長三年天下ますく靜慮ふして諫鼓  
 哲生し蠅螂も斧を礙すこ、おいて時頼禪公もやうやく  
 心を樂しましめたまふお累年人民のためお神心を痛めた  
 まひし疲勞や同年初冬の頃よりかりそめお病床おつさ  
 たまひし夕日夜お重らせたまふより醫官湯液補瀉の術を  
 盡し陰陽の月日七星の祭祀を抽んで其外諸社諸山の神主  
 高僧延命の奉幣護摩祈禱さまく手をつくし行とるれど  
 もさらお快方お赴りせたまひず時頼禪公其天數りねて  
 察し知したまふお一朝子弟一類および重臣等を集めた  
 まひ夫々遺命没命を示し夫より後の新お建おられたる最  
 明寺殿の北亭お籠り心静りお臨終出離なすべしと御側お  
 の尾藤太入道淨心宿屋左衛門入道最信兩人を召しかうれ  
 其外の出入を堅くどめ既お十一月廿二日淨心お仰せて  
 香染の衣袈裟を著し最信兩人お助けられて繩床お上り稍

暫時座禪したまひ次お辭世の頌を誦し給ふ其辭お曰く  
 業鏡 高懸三十七年 一槌打碎大道坦然  
 弘長三年十一月廿二日 道崇珍重  
 と自ら書了りて筆紙を捨兩眼を閉定印を結び口お辞頌を  
 どなへ即身成佛の瑞相を顯して行年五十七歳おして往生  
 の素懷を遂たまふ嗟嘆惜むべし悲むべし寛元四年より康  
 元元年まで前後十一年執權お居て天下の政務お心を委ね  
 たまひ落飾のちまた七十年絶て十八ヶ年の政道正しく就  
 中正嘉二年より弘長元年まで諸國巡行お難苦難行した  
 まひ後やうく一年餘り天目を仰ぐおもひをさしたまふ  
 事古今例し稀ある賢君ありけり己お臨終の、ちもいさ、  
 り印相を變せず跌座少しも亂れずかくて遺命またたかひ  
 北條氏一族および諸家臣いふお及ばず鎌倉中の道俗男  
 女お拜禮を許されしうば老少男女貴賤を論せず我もく  
 と群を爲し此尊容を拜したてまつり慈母の子をうしなふ  
 ぐとく哀哭の涙諸どもお袖まばらざるいありけり將



軍宗尊親王もはなれた痛哭なしたまひ哀情の和歌百首を  
詠じ時頼が靈牌お手向させたまふ京都へも早馬をもつて  
時頼卒去を奏したてまつれば今上 龜山天皇も殊に 親  
心をいたましめたまひ右少辨經任を 勅使として鎌倉お  
用せしめたまふ天下の貴賤悉傷せざるいなくおのづら  
八音歌密し鳥の音をさへ止めたりけり

○相模守時宗執權相續の事

故時頼朝臣嫡子式部大丞時輔の北條重時の次男陸奥守時  
茂と、も京都兩六波羅お居て畿内西國の政道を行はる  
うるがゆゑお次男左馬頭時宗うねて故時頼朝臣の明鑑お  
よつて家督つがせたまふ此とき未だ十三歳おてすな  
ち相模守お轉任し北條第六代の執權と仰がれたまふ理り  
あるりか時宗朝臣天性篤實おして仁徳ふりく禮節自然其  
よろしきお合ひけれは此父おして此子おしますと諸侯呢  
近の元より怪しの匹夫匹婦まで歎びたのしむ時津風枝を  
鳴さぬ天が下幾久しけれと仰がぬおありけり

愛して天下の猛犬をおつめこれを開けしめて樂しみと  
し國政をほしいまふすかるがゆゑお天下の諸侯こも  
く叛す 後醍醐天皇これを逆討あつて誅伐のため日  
月の浮旗を擧たまふ鎌倉を離れて官軍お屬する 輩  
日月お益しまばく争戦およびつひお正慶二年夏五  
月新田義貞がためお高時鎌倉お亡さる文治二年北條時  
政はじめて天下の執權と成てより正慶二年まで百四十  
九年おして九代連綿せし北條の家系こ、お滅亡す其事  
蹟諸書おありといへども編者閑を得は又編次の期もあ  
らん

北條時頼記卷之四大尾

○今古 大久保武藏鑑 彦左衛門功蹟卷

此の義も出版せし松前屋五郎兵衛の傳字都宮騷動の巻お  
續きて彦左衛門が功蹟を詳らう書し面白き書なり大久  
保忠教が一世の事は是れて全けれは何卒前二書と俱に併  
せて浮覽可被下也

因みおいふ時宗朝臣の本支のふるごとく文武兼備  
の名將おして四民これお隨順しかるがゆゑお將軍隠謀  
を企て北條の一門敵時宗をむき將軍お荷擔おし既  
よ干戈を動りすといへども將軍および敵時おまゐる者  
なくおとく時宗が味方を傲すかるがゆゑお將軍お  
も浮落飾ましく京都へ歸らせたまひ敵時も一向和を  
乞ふて時宗お降る私安七年時宗逝去して貞時七代の執  
權となる貞時また才智聰明おして天下歸順すおは平天  
下のため正安三年執權職を師時おゆづり御髪染衣とな  
り故最明寺殿おあらふて天下を潜行して諸士の剛柔邪  
正を糺したまふ八代師時また勉めて政事を正しうせし  
お北條宗方一族おる北條時村を害すかるがゆゑお師時  
止むことを得ず宗方を誅せしお宗方怨念惡鬼となつて  
さまま、師時をぢやましてつひお師時怪死すよつて高  
時其職を續て九代の執權となる高時その性おろりおし  
て仁慈の心なく日月お著修風流お長じあまつさへ大を

○神明相撲闘争記 上下二冊讀切

定價金四十錢

世お日本心腹とら又ハ江戸子氣象とら云て一旦斯と決せ  
しうらハ後へ引事を恥辱とするも事故と義理とよ因てハ  
最も稱すべきなれども此冊紙ハ其江戸子氣象の最も甚だ  
しき火消人足黨の者の中にも所謂組の氣負壯夫が相撲  
取水引清五郎との葛藤より終り芝神明境内に於て大闘争  
を引起したる一奇談おして力士四車大八を始め奮戦激闘  
の未當時の名奉行と稱せられし曲淵甲州殿の明晰に至る  
まで其事實を目前を見るが如く記載し珍書なれば何卒多  
く浮購求高評の程を偏し希ふ

明治十八年九月八日御届

定價一冊金二十錢

編輯人 不詳

東京深川區富岡門前東仲町十六番地  
東京府平民  
出版人 廣岡幸助  
東京橋區三十間堀二丁目一番地  
發兌印行所 泉社  
社主 廣岡麟之助



東 京 圖 書 館

和書門

類

一函

八架

一〇號

四冊